# 東京白楊だより

第20号
平成9.8.30

白楊ヶ丘同窓会東京支部　旧制函館中学校　函館中部高等学校

## 偶感

白楊ヶ丘同窓会東京支部長
52期（昭和25年卒）
二上　達也

東京に出てきてから五十年近くになります。今さら月日の経つのは早いものだと述べるのは月並みな感じです。

しかし馬齢を重ねるにつれ、時間の進み方が妙に早くなったように思えます。

世の中のあやしげな事件も、あっという間に過ぎ去った気がします。

私共の専門用語で言えば秒読みに入った段階なのかもしれません。もち論実際の秒読みは非常に緊迫した状態であり、ある意味では充実した時間帯ですから、それをくぐり抜けたあとは一種の満足感が生まれます。

ただ、年をとった現在では、そんなきついことはごめんこうむりたいものです。

白楊ヶ丘同窓会東京大会も今回で二十一回目を迎えます。人間の年で言えば二十歳前後は最もパワーのあふれる時期です。反面経験不足による未熟さはいなめません。大会を始め、同窓会の諸事業の多くは、幹事の皆さんの御協力により何とか形は作ってまいりましたが、今いち不足するものを感じています。それもこれも明日に向けての楽しみなのでしょう。

事務所一つを取っても個人的好意による提供であって、これは決して恒久的存在ではないのです。

この会報を作るにしても個人の努力に頼るところが大きいのです。

まあここ数年は、東高・西高との交流、宮城支部・大阪支部の存在など輪が広がっています。そのうち何とかなるさと私は楽天的に考えるものです。

いずれにしても二十一世紀の夜明けを会員の皆様共々眺めたいものだと思うこの頃です。

# 二十一世紀に翔く
# 函中健児の育成を目指して

函館中部高等学校長　藤原　忠

白楊ヶ丘同窓会東京支部会員の皆様には、函中に寄せる熱い期待のもと、いつも温かいご支援と激励を賜っておりますことを心より感謝申し上げます。

過日、函館で将棋名人戦第五局が開催されましたが、その折に、日本将棋連盟の会長でもあります支部長の二上達也先生にお会いする機会を得ました。雪中、裸足のまま砂利敷きの中庭で、校長の説話を聞いたことなど往年の函中の授業風景、また、東京支部の様子などをお伺いしながら、将棋好きの私にとりましては、畏敬の師にお会いするが如き気持ちとなり、大変思い出深い一時でありました。

本校は今、文武両道に頑張る勢いのある学校として、進学では今年三月に国公立大学一〇八名の現役合格者を出すなど、かつての栄光に一歩一歩近づきつつありますし、部活動でも今年は全道大会出場の部が例年以上に多く、嬉しい悲鳴をあげております。とりわけ、野球部は春に引き続き、夏の地区大会でも優勝し、七月二十日から札幌円山球場で行われる南北海道大会に駒を進めることとなりました。甲子園目指して、地元函館はもとより同窓会札幌支部の皆様にも絶大なる応援を期待しているところであります。

ＰＴＡ関係では、函中始まって以来初の女性会長が今年度誕生いたしました。先日の高等学校ＰＴＡ連合会全道大会では、提言者として会長自らが、本校で四十七年の歴史を有する「母の会」の活動を報告し、参加者に深い感動を与えました。八月に山形で開催される全国大会でも、この伝統ある「母の会」の活動を紹介することになっております。

また、同窓会長の藤岡敏彦先生は、去る四月二十九日に勲五等双光旭日章叙勲の栄に浴されましたが、六月十二日の受賞祝賀会には大勢の同窓の皆様が参列されておりました。先日は、仙台市にお住まいの昭和五年卒三十二期の安斎秀三様から、母校へのプレゼントとして絵画が寄贈されました。「おたやまばし付近」と題し、広瀬川と仙台の街並みが描かれている八〇号の大作です。本校は「美術館のような校内づくり」を目指しており大切に飾らせていただきたく思っております。

函中一〇二年の歴史の中で、優れたＯＢ、ＯＧの皆様が測り知れないほどの有形無形の財産を在校生に与えていることに、改めて感謝し、我が函中の新校舎パルテノン神殿の四本の柱に託した「自主自立」「自由闊達」「質実剛健」「堅忍不抜」の四つの願いを、在校生にしっかりと引き継ぎ、豊かな心を持ち二十一世紀にたくましく生きる函中健児を育成したい、と教職員一同で決意している昨今であります。

白楊ヶ丘同窓会東京支部会員の皆様には、今後ともご指導とご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

## 自由とヒューマニズムの『白楊魂』

函館中部高校は、札幌南高校とともに、北海道を二分して多くの英才を育ててきた、歴史と伝統を誇る進学校である。

その校風は、自由とヒューマニズムに徹した「白楊魂」の三文字で貫かれてきた。かつて校舎の周囲にそびえていたポプラ並木は、函中のシンボルであった。

高きを望む向学心と、大地にしっかりと根を張る生命力。そのポプラ並木も昭和二九年に洞爺丸台風で倒れ、今では数本しか残っていないが、白楊魂は九〇余年の歳月の中に脈々と生き続けているのである。

中部高校の母校である函館尋常中学校は、明治二八年四月、函館山のふもとの元町に開校したが、校地が狭いため同三九年、現在地の時任町に移転した。

ここに移って間もなく生徒たちが校舎の周りにポプラの若木を植え込んだ。ポプラはスクスクと伸びて大正末期には美しい並木を形成していった。

いつしか、このあたり一帯をポプラが丘と呼ぶようになり白楊魂という言葉に象徴される校風を育んでいったのである。何度も何度も切られても、なお芽を出す不屈の闘志、それが白楊魂である。

週刊読売「現代の名門高校」より

本校の沿革（抄）

| | |
|---|---|
| 明治28年4月1日 | 函館尋常中学校開校 |
| 明治32年4月1日 | 函館中学校と改称 |
| 明治34年5月15日 | 北海道庁立函館中学校と改称 |
| 明治39年1月7日 | 元町校舎から現在地に新築移転 |
| 昭和23年3月31日 | 旧制中学校閉幕 |
| 昭和23年4月1日 | 北海道立函館高等学校として発足 |
| 昭和25年4月1日 | 北海道函館中部高等学校として再発足 |
| 昭和47年10月4日 | 制服廃止、服装の自由化 |
| 昭和60年10月12日 | 創立90周年、ポプラ植樹 |
| 平成2年6月 | 三代目校舎改築・着工（平成5年完成） |
| 平成7年10月14日 | 創立100周年 |

本校にて学ぶ生徒への指針

本校で学ぶ生徒のほとんどは、さらにより専門的、学問的に学べる大学進学を目指します。これは本校での三ヶ年の幅広い学習の中から、自分の可能性の伸展をより高度な学究の場で図ろうとする意欲によるものです。

ただそこには、全国の大学進学を志す者との勉強での競い合いが待ち受けています。大学進学を目指す者はしたがって、この厳しい勉強に打ち克つ強い精神力と、やがては各分野での指導的立場に立ち得る人格を養っていかなくてはなりません。

（進路指導部から）

# 白楊ヶ丘同窓会東京支部
# 第20回親睦大会

65期（昭和38年卒）
副支部長　菅原　大作

“心のオアシス東京支部を活力ある集いに”をテーマに、白楊ケ丘同窓会東京支部の平成八年度「第20回親睦大会」が、10月18日（金）午後五時より、東京・千代田区九段北の「アルカディア市ヶ谷・私学会館」で、来賓及び同窓生およそ百八十人が参加して行われた。

今回の特別企画は、昭和四一年・第六八期卒業の山本晴義氏（横浜労災病院心療内科部長）の講演「ストレス時代の心とからだの健康」が行われた。

山本氏は、昭和二三年に東京生まれ。中学二年時に的場中学校へ転校。思春期を函館中部高校で過ごす。昭和四七年には東北大学医学部を卒業。平成三年に横浜労災病院心療内科部長に就任している。日常の診療活動のかたわら、『ストレス時代のヘルシーライフ』をテーマに各地で精力的に講演活動を行うほか、体協公認のスポーツドクターとしても、プロサッカーや女子バスケット、陸上競技のトップ選手のメンタルアドバイザーとしても活躍。一般向けに『ストレスに勝つ』『ストレス・精神疲労の治し方』『人間関係ゲーム』『失敗しないやせ方』『ストレス教室』などの著書も多い。

山本氏は、心療内科は「心理療法も併せて行う内科で、ストレスとの関係で変動する心とからだの関係した病態、心身症を専門にしている」と前置き。「例えば、ひいき力士の勝ち負けに興奮して血圧が大幅に上がる人や、普段は正常血圧だが医師や看護婦などが計ると血圧が上昇する白衣高血圧があるが、心とからだの関係に気づきを持たせることが我々が行う医療のポイントになる。

心身症の病態は様々で、特別な病気ではない。例えば、胃潰瘍や十二指腸潰瘍は大人の病気と言われていたが、受験のストレスで中学生や高校生、時には小学生でも吐血する例や失恋が契機で食べられずやせた女性、多額の借金で首が回らなくなった人、緊張するとトイレに行きたくなる人なども心身症である。

心身症の原因はストレスだが、ストレスの原因をストレッサーと言う。ストレッサーは、外側から来る嫌な刺激、例えば借金や受験、嫌な奴などがあるが、人の顔が違うように異なっているので、自分にとって一番のストレッサーが何かということに気づくことが大切である。

ストレス状態は、頭痛であったり、心臓が苦しくなったりする場合がある。それと同時に、心の症状として、不安になったり、いらいらしたり、憂鬱になったり、また煙草の本数や酒量が増える、あるいは会社を休む、人を殴る、浮気をするなどの行動の異常もストレス状態の一つとして現れることがある

しかし、ストレス状態が、逆に健康にしてくれる信号ということもあるので、自分にとって一番のストレッサーは何か、一番現れやすいストレス状態は何かということに気づくことが大切である。

ストレスは悪者と思われているが、全くストレスがない状態では逆にいらいらして仕事の能率が上がらず、ある程度のストレスがある方が生産性は上がる。

目の疲れや肩こりが多い、背中や腰が痛くなる、朝気持ち良く起きられないことがある、頭がすっきりしない、という症状がストレスの初期に出るが、それらが病気の場合もあるのですべてをストレスの影響とは一概には言えないが、ストレスが溜まり始めると症状が出てくるということを知っておく必要がある。それを知らずに薬による対症療法だけを行っていると、慢性ストレス状態になって、疲れがとれない、腹がはったり痛んだりする、便通異常がある、いらいらしやすい、人と会うのが億劫である、風邪を引きやすくなかなか治らないという症状が出てくる。こうした症状が出た場合、検査を受けて肝機能異常などが見つかれば良いのだが、実際には全く異常がなく、症状だけがある半健康人、半病人の社

会になりつつあることが気掛かりである。

ストレス状態を解消し、健康管理を行う上では、ライフスタイルとサポーターに注目している。

健康的な生活を送っている人は多少ストレスがあっても病気にならず、症状を起こさないが、寝不足や働き過ぎ、暴飲暴食をしている人ではちょっとしたストレッサーで症状が出るので、ライフスタイルをより健康的にしようというものである。

また、周囲に支えてくれる人がたくさんいると、少々のストレスがあっても症状が出ることはないが、一人寂しく暮らして友達もいないという人ではちょっとしたストレスにあうとすぐ病気が出てしまうので、サポーターの有無はことに重要である。

ライフスタイルの基本を、ギリシア時代にヒポクラテスは、運動、労働、睡眠、休養、食事の五つの要素を毎日の生活の中で過不足なくとることと”と提唱しているが、ストレスに満ちた現代社会を乗り切るためのストレス(Stress)解消法として、五つの要素を集約した、s＝スポーツ・毎日十五分の運動習慣をつける、t＝トラベル・自然に親しむ旅、r＝レクリエーション・遊びは心の潤滑油、e＝イーティング・皆で楽しむ食卓は心に栄養を与える、s＝スィンギング・大声で歌うカラオケ健康法、s＝酒、睡眠、スマイル(笑い)、の実践を勧めたい」と結んだ。

豊富な資料を元に、時にユーモアを交えた語り口で、大変分かりやすくメンタルヘルスケアを解説。ストレス社会を健康に乗り切るための多くの知識と知恵を与えた。

講演会の終了後、会場を変えて、午後六時三十分より、懇親大会に移った。司会は前年に引き続き、第70期・石黒秀喜氏と第78期・岡部あさ子さんが担当した。

最初に、支部長の第52期・二上達也氏が、「今回の大会には、函館の本部同窓会長を始め、札幌、大阪両支部のほか、函館西、東両校の同窓会からもご出席いただいた。ここ数年の参加者は百五十人前後だが、これを今後は倍増とまではいかなくとも、若い人々へ参加を呼び掛けて同窓会活動を一層活発にしたい」とあいさつした。

続いて、白楊ケ丘同窓会の納谷泰文事務局長が高橋國雄函館中部高等学校長のあいさつを代読した。

次に、来賓として出席された後藤英隆函館市東京事務所長、藤岡敏彦白楊ケ丘同窓会長、鈴木進白楊ケ丘同窓会百周年協賛会事業委員長、高島巌白楊ケ丘同窓会札幌支部長、三橋晃夫関西白楊ケ丘同窓会事務局長、新谷義克函館西高等学校・つつじケ丘同窓会長、渡部同副会長、函館東高等学校・関東地区青雲同窓会日比野朋子副会長、新山春一同幹事長をそれぞれ紹介した。

来賓のうち、藤岡同窓会長は「昨年の母校創立百周年記念式典と祝賀会は、全国の同窓生の皆様のご協力により盛況のうちに無事終了することができた。記念事業の大きな柱の一つとして、同窓生の寄附金による同窓会館の建築があったが、寄附金が目標額に到達せず建築も危ぶまれた。しかし、寄附金の受付期間を三月まで延長して最終的に八千八百万円集まったこと、さらに、同窓会所有の土地を処分した費用二千六百万円から、六千五百万円を掛けて五百㎡の同窓会館を建築することができ、今夏から生徒が利用している。宿泊することもできるので、函館での会合の際にはご利用いただきたい。皆様のご協力に心から感謝したい。なお、次回は、百十周年ということになろうが、その時にも皆様にお会いしたいと考えている」とあいさつした。

続いて、後藤東京事務所長が、木戸浦隆一函館市長のメッセージ『第二十回白楊ケ丘同窓会東京支部親睦大会のご盛会を心からお喜び申し上げます。日頃より皆様には企業誘致についての情報提供や観光PRなど、函館市政発展にご尽力を賜り厚く御礼申し上げます。私と致しましては、今後とも郷土函館を潤いのある人間性豊かな町にするよう努めてまいりますので、皆様のより一層のご支援、ご指導を賜りますようお願い致します。貴会の今後ますますのご発展と会員皆様のご健勝、ご多幸を心からお祈り申し上げます』を読み上げた後、函館で実施されている主要事業、①十年四月開校予定の公立大学の設立、②ベッド数八百五十床の市立函館病院の十年九月移転開業、③函館駅周辺の再開発、④世界で星形城郭を有する都市による国際会議・五稜郭サミット(九年七月末開催)について報告した。

この後、会場内で最も若い同窓生、第九八期(平成八年三月卒業)の柚尚美さんの音頭で乾杯し、懇親会に移った。

会場内には、例年と同様に、東京事務所から寄贈を受けた函館の夜景や函館港、湯の川温泉、元町界隈など、市内及び近郊の景観などをデザインしたポスターが多数貼られ、雰囲気を盛り上げた。

一年振りあるいは久し振りに顔を会わせた会員の間では、先輩、後輩の隔てなく会話が弾み、随所で懐かしい函館弁が聞かれ、記念写真のストロボが光るなど、会場全体が終始和やかな雰囲気に包まれていた。

そして、宴が最高に盛り上がった頃、恒例の寄贈品の抽選会に移った。今回も、北海道産のジャガイモを産地より自宅へ直送する同窓会特別賞や函館市東京事務所寄贈の函館ワインのほか、同窓会員寄贈の洋酒やテレホンカード、雑貨類など、およそ九十点以上が用意され、抽選会が始まった。会場内では、同期の仲間に賞品が当たると周囲から大きな歓声が上がるなど、一段と雰囲気が盛り上がった。

大会の最後に、旧制・函館中学校校歌(同窓会歌)「玄冥の北の一道…」と、函館中部高等学校校歌「火柱のはためく峰も……」を全員で合唱。次回の再会を約束して、午後八時三十分過ぎ終了、散会した。

# 白楊ヶ丘同窓会各支部の状況と他校（西高・東高）との交流

昭和52年に東京支部が発足して21年になります。各支部の誕生のいきさつには諸先輩の愛校心や、ふるさとを想う気持ちが伝わってきます。他校（西高・東高）の状況も含め、同窓会の在り方をもう一度考えてみよう。

## 函館支部設立顛末記

函館支部前幹事長　冨原　章（41期・昭和14年卒）

函館には母校があり、また当然に母校に白楊ヶ丘同窓会本部がおかれている。さらに地元なのに函館支部があるのは何故か。このことは函館支部設立のときに同窓生が一様に持った疑問でもある。

「東京白楊だより第二十号記念号」編集委員会の請いもあり、この際、函館支部設立のいきさつと経過とを述べておきたい。

昭和五六年のこと。当時の白楊ヶ丘同窓会会長笹島吉平氏は、同窓会の運営について、かねてから種々思い巡らせることがあった。

まず第一の問題は、同窓会は市内滝沢町に山林約四万八千平方メートルを所有しているが、この土地は、函館市の要請があって廃棄処分場の用地として近く市に譲渡することになる。その事務処理と予想される代価数千万円の財産管理運営をいかにすべきか。

第二に、昭和六〇年に母校は創立九〇周年記念を迎えるが、この式典は、さらにその十年後に到来する百周年記念式典の前段階として成功させなければならないこと。そのためには当面九〇周年記念に向けて同窓生の意識高揚を図らねばならないが、年に一度の同窓会総会に参集する同窓生は、この数年来僅か百名前後に過ぎず、このままでは全く盛り上がりに欠ける。これは、従来から同窓会の運営は、母校本部の同窓生の先生方に殆ど任せきりであったもので、ここにきて財政的にも機能的にも既に限界があるように思われた。

笹島会長はそこで決断した。これらの問題を打開するためには、会費を徴収できる自主機関として函館支部を設立し、活動を制約されている本部を側面から援助する必要がある、と。

これが函館支部設立の趣旨なのである。

この行動を起こすため、まず趣旨に賛同する者で世話人会を組織することから始めた。東ねの中心として笹野文七氏（三七期、後の初代支部長）、幹事役を会長同期の小熊誠吾氏（四一期）を選び、ほか数人に働きかけて、とにかく第一回世話人会を開いたのは、昭和五六年四月二十日のことである。このときの会合は、函館支部設立の方向と問題点を討議し、まず函館市や近隣に在住する同窓生の支部名簿を作成することが先決であることと決めた。

第二回会合は、一週間後の四月二七日に開かれている。短期間にもかかわらず小熊氏は手際よく設立趣意書はもとより、各期代表者に依頼する各期別名簿用紙や返信用封筒までを取り揃えていた。発送を終わって、いよいよ設立準備が始動する矢先、幹事役の小熊氏が五月二十日に急逝するという不運に見舞われた。

小熊氏急逝はショックであったが後退はできない。第三回会合を六月十一日に開いた。小熊氏亡き後の世話人のメンバーは、笹野文七（三七）笹島吉平（四一）冨原章（四一）當作守夫（四二）近藤達也（四三）佐藤富三郎（四四定）犬島豊（四五）関輝夫（四五定）松尾正義（四六）工藤俊二（四六）中村幹夫（五〇）柴田隆一（五一）中内厳（五九）梅田忠平（六一）片岡嗣秀（六三）（数字は期別）以上十五名となった。この会合で、世話人会を拡大した発起人会、設立総会までの日程を決めるなど具体的な協議に入っている。

ところで、各期の代表者に名簿の取りまとめを依頼したことが意外な効果を生んでいた。それは同期の連携があまり活発でなかった期が、これを機に続々と同期会を開き、組織立ってきたのである。このことは、総会などの人数確認が、各期幹事を通じてかなり正確に把握できることになったわけだ。

通例九月開催の同窓会総会も、日程の都合から、本部と協議の上八月一日に開催したところ、若い期や女性会員にも関心を呼び、例年百名前後の参会者が四百名近くにのぼり未曾有の大盛会となった。この成功は、会員に支部組織の必要性を強く印象づけた。

この後も世話人会は精力的に会合を重ね、会則案などの審議を進めた。また並行して本部正副会長会議、本部役員会議も函館支部設立を議題として開催され、その了承を得ることができた。

九月十八日には発起人会が開催された。各期幹事の関心度は高く、約八十人の参集者があり、発起人として会則案、役員案などの懸案事項が熱心に討議された。

十月二十一日、いよいよ設立総会開催にこぎつけた。場所は函館駅前拓銀ビル八階ホール。支部名簿はきわどく製本が間に合い会場に搬入された。当日の参集者二三一名、三二期の玉村義之輔氏を始め三〇期代の諸先輩が三十数人も駆け付けて下さったのは心強かった。会議は鈴木尊子氏（五七期）のソフトな司会により、経過説明、会則案、役員案などの議事が流れるように進み、満場一致して可決決定され、ここに白楊ヶ丘同窓会は発足したのである。

四月十一日に第一回世話人会を開いてから半年を経たことになる。

この後、創立九〇周年記念、百周年記念の大きなイベントも、函館支部が実行部隊として本部を補佐し、いずれも成功に導いた。

なお、滝沢町の同窓会所有の山林は、そのすべてを市に売却し、代価八千八百余万円は特別財産管理委員会が管理し、その資金で的場町に土地と白楊会館の建物を購入、大改装を行って、在校生や同窓会の利用に供している。残余の資金一七〇万円余は特別財産管理委員会の管理のもとにある。

設立に努力された笹野文七初代支部長、近藤達也第二代支部長は既に鬼籍に入り、現在は葛西善一郎（四三期）第三代支部長のもとに函館支部は結束している。

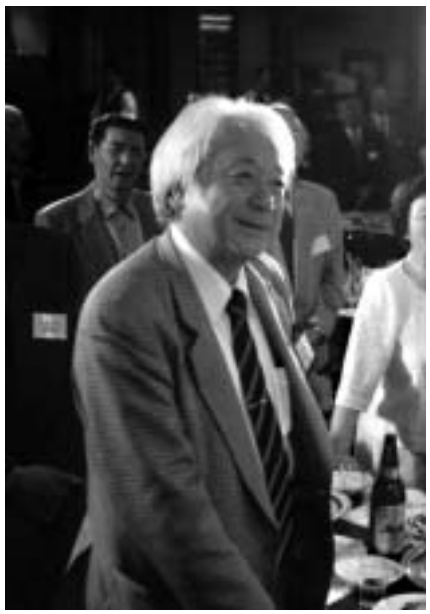
# 札幌支部その「過去・現在・未来」

札幌支部長　高島　巌（51期・昭和23・24年卒）

**札幌支部の現況**

「東京白楊だより」第二〇号記念号ということですが、まことにおめでとうございます。

恒例の札幌支部の例会、さる六月二一日、東京から杉田副支部長さんのご参加を頂いて終えたばかりでしたが、本年は二年に一度の名簿の発行年に当たり、かねての懸案であった、八〇期以降の会員を確保するのを主な目的に、母校の一〇〇周年記念事業で整理された名簿を頂いて道内会員の所在を確認、整理して、前名簿よりも約一三〇人多い一五五〇名の名簿を発刊することが出来ました。札幌支部とはいいながら、函館以北、全道一円の同窓生からなっている、函館、東京に次ぐ大きな支部で、会の運営は、支部長一名、副支部長三名、幹事長一名、常任幹事八名、各期幹事六六名、会計監査二名で行っております。



前支部長三浦祐晶氏（四一期）の発案で、全会員に振り込み用紙を送って年会費（二〇〇〇円）を納入頂くようになってから会計状況がいちじるしく改善され、年間約三〇〇万円規模の会務が行われておりますが、赤字に悩んで、総会の開催すら危ぶまれたという話が夢のようです。

八年間幹事長を勤めて下さった五十嵐義三さんが本年引退され、同じく市内に法律事務所を開いておられる藤田美津夫（七二期）さんにバトンタッチすることになりました。苦労の多い仕事ですが、頑張って頂きたいものです。

**「創立の頃」**

札幌支部は、昭和五四年、当時の同窓会長、笹島吉平氏（四一期）の依頼を受けた、前札幌副支部長、工藤欣弥氏（四一期）の八面六臂の奮闘のおかげで出来たものです。

何事をするにも、先ず名簿がなくてはなりませんが、旧国鉄、道庁など、同窓生の集まっていそうな所にわたりをつけ、ってを頼っては多くの人に会われて資料集めをした後、翌昭和五五年八月五日、佐藤祐司氏（二八期）が支社長をつとめる日本交通観光北海道支社に、成田幸雄（三八期）、山下茂（四一期）、小寺昭（四二期）の諸氏に工藤氏の計五名が集まって協議したのが、支部設立の起点であったとされております。

この席で、各期から一名ずつ集まってもらって相談しようということで往復葉書二四通を発送、同年八月二九日、一四名が出席して発起人有志相談会が開かれ、ついで九月一三日、各期代表者へ名簿提出の依頼状発送までこぎつけましたが、実は、この各期代表一名を見つけ出すのが大変な作業であったと申します。いろいろな名簿から拾った名前を、電話帳や北海道年鑑などとつきあわせて一つ一つ確認して行ったわけです。

定時制関係の名簿は、昭和一五年夜間中学第一回卒業で、長く母校の定時制で教鞭を取っておいでであった谷川伸先生が一手に取りまとめて下さったといいます。

こうした苦労のあと、約一〇〇〇通の開催通知発送までこぎつけ、翌昭和五六年三月七日午後六時、三越デパートの大食堂で創立総会が開かれることになりました。二八七名の参加者のもと、佐藤祐司氏を支部長とし、ここに白楊ヶ丘札幌支部がにぎにぎしく発足したのでありました。

その後佐藤氏の急逝のあとを受けて、昭和六一年から三浦祐晶氏が第二代支部長、平成七年から高島巌（五一期）が第三代支部長を仰せつかって今にいたっております。

また、年一回の総会は、薄野のビヤホール「セントラルパーク」を会場として、六月第三土曜日に開いており、毎回、約一〇〇名程度の会員の参加を見ております。

**「将来に向けて」**

前にも触れましたが、同期・同窓が懐かしいと思うのは卒業後十年以上経ってからだといわれますが、転

---

## 白楊ヶ丘同窓会札幌支部大会に出席して

東京支部・副支部長
54期（昭和27年卒）杉田　博子

前日の台風が過ぎ去って、夏を思わせるような、梅雨とは名ばかりの晴れ渡った六月二十一日、同窓会札幌支部大会に出席のため札幌へ発った。

毎年同じ会場なので、馴れた道をセントラルパークへと急ぐ。会場には、両側に校歌、そして懐かしい恩師、席の隅の方には同期の方々の顔があり故郷へ帰って来たという実感が湧く。総会は例年の通り物故者への黙祷に始まり、この春岩見沢から着任された中部高校の新しい校長藤原忠先生の御挨拶があった。今や中部高校は文武両道で、国公立大の合格率も良く、野球部は地区優勝して丸山球場に出場したとのこと、PTAにも、中部高校始まって以来の女性会長が誕生したことなど母校のお話は興味深く聞く。札幌支部長高島巌さんは新しく名簿を作ったが若い期の異動が激しく、まとめるのに御苦労なさったとのこと、東京支部も同じだと思った。東京支部のように毎年卒業生の講演を入れてみたいとのこと、よく出演者をさがしてくると羨ましがられたが優秀な卒業生が大勢いるので、札幌にも適任者がいらっしゃるのではと思う。懇親会では、例年のように甲斐熊五郎さんの歌謡ショーに楽しく過ごした。七十八名の出席者が旧友との再会に、あちこちから笑いがこぼれる光景は心なごむものがあった。終わりの校歌斉唱は学生時代を想い出させ、いつ歌っても懐かしい歌であった。函館上空は曇りで、函館山は見えず残念であった。

牛に似し故郷の山梅雨曇り　博子

勤など、移動が多くて定着し難い年代であることもあって、八〇期以降の若い会員を増やしたいと思っておりますが、恐らく永遠の課題として残って行くでしょう。

初め工藤欣弥氏が、引き続き西田一郎氏（五七期）が担当して下さっていた会報「白楊ヶ丘札幌」が、西田さんの都合でできなくなってから跡継ぎがいなくて、ここ三年ほど刊行できていないのが悩みの種です。「東京白楊だより」に刺激されること大なるものがありますが、何とか復活させたいものと思っております。

総会だけが殆ど唯一の会合ですが、これもマンネリ化していて、なんとかならないかという声が上がっておりますので、来年から新機軸でやってみたいものと思っております。

東京支部がやっているように、同窓生の講演を聞くようなことを考えたいと思っておりますが、どなたか候補者を推薦して下さる方がおりませんでしょうか。

函館中部高校の野球部が実力をつけてきて、毎年のように地区大会で優勝、札幌にやってきます。そのたびに常任幹事の誰彼が手分けして応援に出ていますが、同窓会としても出来るだけの援助をして差し上げたいとは思っておりますけれども、会報の発行年かどうかで、資金事情が周期的に変化しますので、いつも同じように出来ないこともあるのが心苦しい限りです。

母校の発展に協力するのが同窓会の第一の使命だと思いますので、この点でも頑張って行きたいと思っております。

# 宮城支部の歩み

宮城支部長　葛西　森夫（42期・昭和15年卒）

大正時代から大学人を中心に在仙函中会が開かれていたと言われるが、詳しいことは不明である。私が旧制二高の学生であった昭和一七、八年頃に、函中会を開くから出て来いと言われて、出席したことがあった。世話役は当時東北帝国大学の第一外科の講師であった前多豊吉氏（30期現秋田大学名誉教授）で、病理学助教授四柳正造氏（24期故人）が会長役をされていたように思う。出席者は六、七人だったと思うが、五十年以上前のことなので記憶がはっきりしない。その後は大学の教官も殆ど全員が出征して会を開ける状態ではなく、戦後もしばらく途絶えたままであった。

昭和三十八年になって、黒井悦郎（32期故人）、佐々木淳二（24期故人）、本島正男（39期故人）、加藤義夫（39期）、佐藤壽郎（45期）等が在仙函中会の復活をはかり、同年八月に総会を開催した。そこで会長に専田義雄氏（22期故人）を、顧問に私達の頃の英語の先生であった福田英夫氏（当時東北大学教授　故人）を推選し、年一回の総会を決めた。以来毎年総会を続けてきたが、その間、中部高校卒業生をいれて開催したり、函商同窓会との合同の会を持ったりしたこともあった。

昭和四十三年に会長が鍛治一郎氏（23期故人）に交代した。昭和五十八年の総会において、以前から懸案であった、函中・中部高の卒業生を包含した組織にすることを決議し、鵜沢秀男（40期最近逝去）、佐藤壽郎、誉田清一（45期）池田知行（47期）の各氏を委員として準備会を発足させた。

昭和六十一年九月六日に函中・中部高を含めた白楊ヶ丘同窓会宮城支部設立総会を仙台市ホテル白萩で開催、参会者は三十七名であった。招待者として白楊ヶ丘同窓会の本部より笹島吉平会長、東京支部より池田和行支部長が招かれた。この総会で会長に鍛治一郎、副会長に桜井栄三（35期）と加藤義夫両氏、さらに幹事長池田知行を含め幹事二十二名を改めて選出した。笹島会長が開催日を間違えて総会に出席されず一ヵ月後に仙台を訪れ、当方は会長、副会長と数人の幹事による歓迎会をひらき再び楽しい一夜を過ごした。

昭和六十二年の白楊ヶ丘同窓会宮城支部の第二回総会では会員名簿の作成が決定され、実行委員に誉田清一、鷹見良二（45期）、池田知行、澤正男（53期）の各氏が選出された。名簿は同年八月末に完成し、全会員に配布した。その後、名簿は毎年改訂して配布している。

昭和六十三年の支部総会では、函館の他の高校の在仙同窓会との交歓をすすめる提案が出されて承認された。また総会反省の役員会で幹事の半数を中部高卒業生にすることに合意が成立した。平成一年七月の支部総会で鍛治会長を名誉会長に推選し、会長植木正二郎（35期）氏副会長に及能二三男（35期）氏と加藤義夫さらに幹事として新たに四名の中部高卒業生を委嘱した。西高とは前から個人的な接触があったが、九月に両校から幹事役が十七名集まって協議し、各校合同の同窓会（仮称臥牛会）を平成二年二月に開催することを決し、手分けして他の高校の同窓会に呼びかけることにした。二月十日の準備会には両校のほかに遺愛、函商、水産、東高の代表が集まって運営を相談し、また会長は当分の間、白楊ヶ丘同窓会支部長が兼ねることを決めた。

平成二年二月十七日に函館臥牛会総会をホテル白萩で開催し、出席者八十四名の大盛会であった。出席者は皆感激して、このような会の発足を喜び、再会を約した。以来、毎年二月に函館臥牛会が各校の当番で開催され、その間に白百合、函工、ラサール、有斗も加わって益々盛会さを増し、今年は第八回の会が函工の世話で盛大に開かれ百名を越す参会者があった。なお、函館市からも毎年この会に商工観光部から数名の職員を派遣し、市の観光事業のPRに努めるとともに会の運営の援けともなっている。

従来、白楊ヶ丘同窓会支部総会は夏休み前に開催していたが、六、七

月は大学により試験前であったり、すでに休みに入っていたりで、開催日程の決定に苦労していた。それで平成二年から、入学生の歓迎を兼ねた総会を秋にすることにし、現在に至っている。平成二年八月に植木会長が患われ、葛西が会長になり、同時に副会長、加藤義夫、佐藤壽郎、幹事長　高木薫（45期）の各氏を選任した。幹事に若干の変更があったが、大半は現在もそのまま務めている。この頃までには、申し合わせのような簡単な会則があるだけであったが、母校の百周年を機に、また他校同窓会との関連等からも、支部会をしっかりしたものにする必要に迫られ、きちんとした会則を作り、会員からは会費を出してもらって財政的にも基盤を確立することにした。平成三年の総会で幹事会の作成した会則案が承認された。総会に出席した会員の負担だけで会の運営を賄っていたこれまでと違って、少なくとも会費を出した会員には支部の動向や収支などを知らせる責任があるとの意見によって、小さいものでも会報の発行を考えるべきだとの提案に基づき、とくに担当者の負担などの問題もあったが、幹事長の犠牲的な意欲によって発行が決定し、平成四年から発行され、今年は第五号が出る予定である。以上、白楊ヶ丘同窓会宮城支部の沿革を簡単に紹介した。この他にも、総会の準備や後の反省会などで役員会は年に三、四回開かれるので交流は多く、役員同士お互いに気心が良く通じている。その他の会員も総会や臥牛会を楽しみにしている人が多い。現在の会員数は百七十名である。

# 関西支部の発足にあたって

関西支部長　手塚　泰彦（52期・昭和25年卒）

このたび、白楊ヶ丘同窓会東京支部から「東京白楊だより」第二〇号の記念号に対する掲載記事の執筆依頼が当支部にあり、拙稿をお届けすることになりました。

白楊ヶ丘同窓会東京支部がいつ設立されたかは存じませんが、「東京白楊だより」が発刊されてから今年で二〇周年を迎えられるとのことですので、東京およびその周辺の同窓の皆様には二〇年以上にわたる交流の歴史があったものと思います。東京支部のますますの発展をお祈りいたします。

さて、白楊ヶ丘同窓会関西支部は、本年九月六日に予定されております「白楊ヶ丘同窓会関西支部大会」における総会の議を経て正式に発足することになりました。このための準備は、今井欣悦氏（二八期・大正一五年卒、大阪教育大学名誉教授）を代表世話人とする関西在住の有志によって三年ほど前から始められました。その活動の最初のイベントは、母校の創立一〇〇周年と同じ年の平成七年一一月一一日にホテル・グランヴィア大阪で開催された「第一回関西白楊ヶ丘同窓の集い」でありました。この集いには、白楊ヶ丘同窓会長・藤岡敏彦氏と函館支部長代理・鈴木進氏の二人の来賓とともに、約五〇名の会員が参加しました（この集いと当時の当支部の状況については、関西支部事務局長・三橋晃夫氏が「東京白楊ヶ丘だより」第一九号に寄稿しておられますので、詳しくはそれをご覧ください）。その翌年の平成八年一一月一七日には「第二回関西白楊ヶ丘同窓の集い」が開催されましたが、この集いには来賓として函館中部高等学校長・高橋国雄氏、東京支部長・二上達也氏（氏は私と同期の桜です）、白楊ヶ丘同窓会協賛事業委員長・鈴木進氏の三氏が出席されました。この集いでは、関西支部の発足に向けての支部規約の大綱が提案され、さらに今井欣悦氏に替わって私が関西支部長を務めることが決まりました（今井欣悦大先輩はご高齢のため支部長就任を辞退されました）。

私たち玄羊会（五二期・昭和二五年卒）の同期生は敗戦間近の昭和一九年に旧制函館中学に入学しました。一年生のときには授業がほぼ順調に行われましたが（ただし、厳しい軍事教練も教科の一部でした）、二年生になってからは授業はまったくなく、毎日が勤労奉仕という名の肉体労働でした。私のクラスは主に函館駅で荷物の積み降ろしに従事したのですが、娯楽の乏しい当時のこと、昼休みになるとクラス全員で将棋をさしたものです。そのなかから二上将棋連盟会長が生まれ育ったのではないかと私は想像しておりますが、いずれ二上氏にその辺の事情をお伺いしたいと思っております。そして、昭和二〇年八月、勤労奉仕の最中に終戦を迎えました。戦後の混乱のなかで、やがて学制改革があり、私たちは中学四年から高校二年に進学しました。当時はまだ男女共学ではなく、私たちは北海道立函館高等学校の生徒として昭和二五年に卒業しました。私が闇市のまだ盛んだった函館の地を去ったのはその年の四月のことでした。上京のとき、リュックサックに米をいっぱい詰めて津軽海峡を渡ったことを約五〇年後の今でもはっきり記憶しております（なにせ当時は、一食につき一枚発行される外食券がなければ外食できなかったのですから）。それ以来三〇年間、私は東京で学生時代と教員生活を過ごしました。東京時代の後半には、東京在住の同期生（玄羊会）の集いがしばしば開催され、私もこの集いには何回か出席しましたが、白楊ヶ丘同窓会東京支部の存在は知りませんでした。このようなことがあってから、私は昭和五五年に関西に転勤になりました。それから一五年の歳月を経て、私は平成七年三月末に京都大学を定年退官したのですが、この年の秋に「第一回関西白楊ヶ丘同窓の集い」が開催され、関西に在住する同窓生の皆様に初めてお会いしました。

現在、関西地区に在住する同窓生の数は二百数十名ですが、これからこれらの方々の間の交流の輪を一層広げていきたいと考えております。と同時に母校のさらなる発展に少しでも当支部がお役に立てればと願っております。同窓の皆様のご支援をお願いする次第です。

# 函館西高つつじヶ丘同窓会

函館西高つつじヶ丘同窓会会長　新谷（しんや）　義克

「東京白楊だより」を読ませて頂くと、二上支部長さんはじめ、役員の皆様の御努力でたいへん充実した運営がなされているのが判り、さすが百年の伝統をもつ函中の同窓会だなあと、日頃感銘しております。

私自身高校二年より三年に進学するとき学制が変わり男女共学となり函中より庁立にまわされ新制西高第一期生として卒業しましたが二上支部長さんの一期後輩で佐々木順一さんや喜多威夫さん達と同期の白楊ヶ丘同窓会第五十三期の会員でもありますし、また函館の本部では藤岡先生御兄弟がそれぞれ中部高と西高の同窓会長をなさっており、いわば兄弟同窓会のような関係でもありますので、一昨年青雲同窓会と三校の交流が実現しましたことを心より喜んでおります。

私達は昨年庁立高女を含めて西高創立九十周年を迎えました。東京支部は十二年前、庁立高女と西高の同窓会が合併し西高つつじヶ丘同窓会東京支部として再発足しました。現在、名簿では会員約二千名、隔年の総会には四百名弱の参加を得て盛会に行われておりますが、組織の基盤はまだまだ弱く、念願の定期の会報もまだ出していません。現在同窓会組織として内容の充実と活性化を目指しているところですが、なかなか思うようにはいかず同窓会運営の難しさを感じています。

私達の何回目かの総会のとき先輩の庁立高女の元お嬢様方が高女時代、当時近所や通学途中で出会った函中や市中の紅顔の美少年達（皆様のことです）は今どうしているか函中や市中の同窓会にいって会ってみたいなあという話になり、学校が違っても同じ故郷をもつ人達の交流があってもよいのではないかと思い、二上支部長さんや青雲同窓会の中村会長さんにお伺いしたところ心よく御賛同いただき一昨年より実現したわけです。

ちょうど先日も白楊ヶ丘同窓会のゴルフコンペに三校合同でやりましょうというお誘いの連絡がありましたが、これからは希望者が他校の総会にゲストとして参加したり、いろいろな面で交流の輪が広がれば同窓会活動に彩りを添えることにもなると思います。

人間形成で大事な青春時代を素晴しい共通の故郷函館で過ごしたことは私にとって大変な人生の財産であり、そのようなことを大切にする方々の集まりにいくらかでもお手伝い出来ればと思い、同窓会運営に参加しております。

『友と交わるには三分の侠気を持するを要す。人を作るには一分の素心あるを要す』と先人がいっていますが、損得抜きの心意気、すばらしいものに感動する純な心をいつまでも持って人生を歩みたいものですし、また同窓会の原点でもある人生哲学ではないでしょうか。

白楊ヶ丘同窓会の皆様にはこれから先輩同窓会としてよろしく御指導と御交誼の程をお願いし、白楊ヶ丘同窓会東京支部の御発展を祈念し御挨拶といたします。

---

わが街函館

# 古都の奇蹟

辻　仁成

函館は観光地だが、最後にバブルが押し寄せたせいで、街が立派にならずに済んだ奇蹟的な古都なのだ。一つ二つ外観をそこなう高層建築物が函館山の麓に立ちはしたが、バブリーな期間が短かったせいでそれ以上には増殖せず、美しい景色が保たれた。

だからか、二十年も前の景色とそれほど変わっていないのが特徴であり、私が愛してやまない所以である。街を歩くと二十年前にタイムスリップしてしまったかと思うほど当時のままで驚く。五稜郭などの新中心地はそれなりに変化してはいるが、元町や青柳町などの旧市街地はほとんど昔のままである。

十字街のビリヤード場亀田屋も信じられないことにまだ健在である。

私たちはそこで学校帰り仲間たちとよく四つ玉をやった。ポンタンをはいて、潰した鞄を抱えて、頭はリーゼントだった。ビリヤードの玉の弾ける軽快な音が青春のビートサウンドでもあった。

私はここ数年小説に専念して、この街をモチーフに幾つかの作品を書いた。ベレンコをモデルにした「クラウディ」や、密猟をする高校生を書いた「母なる凪と父なる時化」それから今年芥川賞を頂いた「海峡の光」など、私の小説の半分ほどはなんらかの形で函館が舞台として関わっている。

芥川賞のお陰で今年は函館市民栄誉賞というものまで頂いてしまった。授賞式の後の講演会には千人ほどの人が集まって私を歓迎してくださった。たった四年しか住まなかった街だけど、私にとっては間違いなく思い出深い故郷である。

これからも函館を折に触れ描いていくことになるだろう。都会はどんどん変化してしまい、思い出がますます住み着きにくくなった。変わらない函館にはまだまだ懐かしさが染みつきやすい風景が沢山残っている。

●辻　仁成
一九五九年生まれ。
一九八九年『ピアニシモ』で、すばる文学賞。先ごろ『海峡の光』で芥川賞受賞。
一九七七年函館西高卒業

# 函館東高・青雲同窓会

青雲同窓会幹事長　新山　春一（東高11回生・昭和36年卒）

函館東高校校舎

初めに過日の関東地区青雲同窓会（五月三一日）には、田沼白楊ヶ丘同窓会東京支部監事の御出席と御祝辞を頂戴し、誠に有難うございました。

一昨年から始まりました交流の輪をより大きく広げる為にもと思い、会報原稿の依頼を快諾した次第です。

何を書こうか考えましたが、関東地区青雲同窓会の生い立ちと現状について述べさせていただきます。我が同窓会は最初、市中、市高、東高とそれぞれ分かれて活動していましたが、関東地区青雲同窓会を一本化しようと云う声が高まり、昭和五八年八月新橋第一ホテルに於いて、ビア・パーティーを開催したのが始まりでした。函館本部にて発刊されている名簿を頼りに、関東地区在住の会員に案内状を一〇〇〇通程送付しましたが、転居先不明で半数以上返送されるなど苦労いたしましたが、各期の代表者が集まり、役員会を構成し、昭和六〇年五月関東地区青雲同窓会設立総会を開催しました。その後、会を重ね今年五月三一日、第一三回総会（東京グランドホテル）を無事終了するに至りました。

年間行事として総会、納涼会、新年会、ゴルフコンペ（春と秋）を定例化し、幹事当番を順番制にし、本年六月一日から総会までは第一六回生（昭和四一年卒業）が、担当する事になっています。幹事当番時は年齢が五〇歳になった時に当たるため、子育ても終わり、一八歳の高校生に戻ったような気持ちで、ハガキの発送、打ち合わせ等、本番までの準備は非常に楽しい反面、苦労も多いようです。当会は発足当時から中村隆俊会長の御好意により、事務局を戸田中央総合病院院長室に置き、三人の秘書の方々に関東地区に在住する三〇〇〇名の卒業生のうち二二〇〇名の名簿を管理し、会費の収納状況、各行事の案内、役員との連絡等、全面的にお願いしています。非常に多忙をきわめており、申し訳なく思いながら感謝しています。その中で総会の案内状関係は、毎年二〇〇〇名に発送するため、幹事期の方々にお願いし、総会の内容についても毎年各期が、趣向をこらして楽しい会にしています。

定例会には、本部の会長、副会長、幹事長、校長先生、恩師、函館市東京事務所長、市長（昭和二八年卒）に案内状を出し、一昨年からは、貴同窓会とつつじが丘同窓会の会長さんと役員の方々に御出席して頂き、大変楽しい会になって居ります。

昨秋の貴同窓会に招待を受け、二上支部長さんとのお話しの中で、ゴルフ合同コンペの話が出、当中村会長に伝えたところ、つつじが丘同窓会も交えて、仮称『函館会』を開催すべく準備をしてはとの事、実現すればまた一歩、三校のきづなが強くなると思います。

末筆ながら、白楊ヶ丘同窓会東京支部のご発展と皆々様のご活躍を祈念いたします。

# 白楊ヶ丘同窓会東京支部大会に出席して

青雲同窓会　副会長　日比野朋子（東高7回生・昭和32年卒）

我が愛する青雲同窓会関東支部も、今年は創立一三周年を迎えるとか。

これも一重に中村会長の血の通った温かいご支援があったればこその一言に尽きるように思います。そして、なんとこの私がその中村会長の代理で出席するという大変に栄誉に輝く役目を担うという出来事があったのです。

平成八年一〇月一八日、場所は市ケ谷の駅前、かつての「私学会館」「アルカディア市ケ谷」。函館中部高校の同窓会『白楊ヶ丘』の関東地区大会が開催されました。そこに超多忙な会長の名代（？）として、幹事長の新山さんと出席いたしました。西高校の同窓会の会長、副会長も当然ご出席され、学校の枠を超えて歓談し、楽しいひとときを過ごすことが出来ました。一昨年から、中部、西、東の各高校の同窓会総会（関東支部）には、他の二高校をご招待するということになり、青雲同窓会にも、中部、西の両校からご出席頂いております。共に故郷、函館で多感な青春の三年間勉学をしたという共通項は年月を経ても、色褪せることなく、かえって年と共に鮮やかに蘇る部分もあります。どなたの発案かは知りませんが、とても気の利いた企画であると思います。特に私の兄は旧制の函中出身で、中部高校の校長を勤めていた時期もあり、その会で同期の方とお会い出来たことは、今は札幌に住み、たまにしか会うチャンスのない兄と妹との、人を介しての素敵なコミュニケーションでした。散会後私と新山幹事長は、西高校の新谷会長に誘われて新宿の行きつけのお店ですっかりご馳走になってしまいました。話は盛り上がり、新谷会長は私の出身校である附属校での大先輩であることもわかりました。

氏は自身の医院を経営されると共に社会福祉の方に力を入れてらっしゃるようです。世間は狭いもの、縁は異なもの、これからの長い老後の生活に活力を与えてくれるものは、やはり人と人との和、つながりでしょうか。一三年を迎える青雲同窓会にも、もっともっと沢山の先輩、後輩方達の参加で、新しい風も吹くでしょうし、活性化もされると期待したい思いです。

青雲同窓会会報「関東せいうん」第四号掲載原稿より

## 萩原獅郎先生に聞く

37期（昭和10年卒）
太田　冬雄

遠くの会員なので白楊ヶ丘にかかわる事は殆どないのですが、思いがけなく昨年は、鹿児島に来られた萩原先生にお会いし、お話しを伺う機会に恵まれました。この四月には三度目の機会がありましたが、いつも感じましたのは、現在、米寿を越え独居しておられる先生が、誠に矍鑠、活力さえ感じられたことです。しかし、それもお聞きしてみると、当然のことながら、つまりは日々の生活にあると頷かされました。

「規則的な生活時間、適切な手作りの食事、適度の運動、リフレッシュなど」理想的ともいえる健康に配慮された日常を、淡々とこなしておられる。このことは、歌人でもある先生の次の作品からも窺われる。

【独居の一茶や良寛偲びつつ米寿の吾や朝の米とぐ】

【難しきことは知らねど花一輪一服の茶を独り楽しむ】

その上で先生は、ライフワーク『萩原家の系譜』をまとめるべく着々とすすめている。こちらに滞在中も、その調査のためかなりの時間を図書館にこもられる。しかも、調査は資料に止どまらず、現地にも及び、始祖の跡を確かめられている。その折に詠まれた次の作品には、先生の深い感慨が感じられる。

【吾が先祖の拓きし萩原地図に無きも萩原川の今に流るる】

【萩原川のほとりに佇てば目交ひに高千穂の山雲に聳ゆる】

さらに先生は、生涯の事として、太平洋戦争下、戦場で生死を共にした戦友への慰藉、戦死者への鎮魂を上げている。三年程前の現地慰霊団には最高齢で参加されたという。当時先生は次のような作品を詠まれている。

【再びは見じと思ひしセブとレイテ慰霊に巡る四十余年経て】

【高らかに共に杯あげし戦友レイテに征きて多く還らず】

因みに、先生は歌歴十余年、北海道、原始林社の同人として着実な作歌活動を続けられている。

（鹿児島在住）

## 知らなかった秘話

37期（昭和10年卒）
室谷　邦雄

私達函中在学当時のある先生の武勇伝のことを最近聞く機会があったのでご披露したい。

この事件は昭和八年頃の話である。当時の校長は千葉精一先生。高等師範や大学の新卒の若い先生方をスカウトして私達の教育に当たらせていた。その内の一人の先生（現在健在・特に名を秘す）の秘話である。

その先生がある日、十字街のキャバレー「武蔵野」で飲んでいた。「武蔵野」は函中先輩の阿部良平さん（大正六年・一九期・故人）の経営していたキャバレーである。

阿部さんは当時、函館の夜のボスで暴れん坊で有名であった。北海道道南会（首都圏在住の函館地方出身者の会）の生みの親でもある。ここで、その先生はホステス相手にご機嫌よく飲んでいた。たまたまチンピラの「やくざ」が三人近くに居り、先生のところに居たホステスを呼んでも自分の席に来ないというので、ビール瓶を振りあげて言い掛りをつけにきた。先生はこれを阻止しようとして、腕をかざしたところハズミでビール瓶が飛んで窓ガラスが割れ、破片が飛び散り、チンピラの一人が怪我をした。

そこで先生とチンピラ三人との間に悶着が起きて騒然となったのである。この時、阿部さんがひと役買い、阿部さんのとりなしで一応納まったが、腹の虫が納まらないチンピラは先に店を出て、先生の来るのを待ち伏せして、棍棒で先生に乱暴を働き、殴り倒した。多勢に無勢、先生の負けは明らかであった。

運良く、ちょうどその時、木村多吉という大親分が通り合わせて、素人一人を三人がかりで乱暴するとは何事かと叱り飛ばして、チンピラを連れて行ったので、先生はタクシーで帰り事なきを得た。

翌日、先生は阿部良平さんを訪ねて昨夜の不始末を陳謝した。阿部さんは新聞沙汰にならないように、手を打ってくれたので、日刊紙には出なかったが、豆新聞が伝え聞いて、先生に取材を申し込んできた。阿部さんは一人で会わないようにと注意し、自分が立ち会って話をつけてやろうということになり、「武蔵野」で落ち合うことになった。阿部さんは「先生は何も悪いことをしたわけでないから堂々と話し合ったらよい。信頼する同僚か上司の人を一緒に連れて来なさい」とまで云ってくれたそうである。

この時、板垣周三先生（漢文・柔道）、高梨利行先生（教練）がついてきてくれた。

阿部さんのとりなしで、豆新聞の記者二人、大親分の代理で木村清兵衛という人と三人の先生が盃を交わして手打ち式をしたとは何とも愉快な話である。軍人の高梨先生がサーベルを腰にして、当時の流行歌「君恋し」を歌ったりして、すっかり座が和み、取材の話は飛んでしまい、目出度し目出度しに終わったとのことである。

豆新聞には「さる中等学校の教員暴れる」として報道されたが、函中や先生の名前はまったく出なかった。その記事には「近頃の教員は無気力だと思っていたが、さても元気な先生もあればあるものなり」と結んであったとのことである。

当時の生徒は腕白揃いだったが、先生も豪傑揃いだったようである。千葉校長先生はこの事件を承知していたが、本人が転任するまで一言も云わなかったそうである。

この事件以来、先生は酒の飲み方に留意するようになり、三十余年の教職を一日の欠勤なく無事に終えたと感謝している。

## 恩師の想い出

37期（昭和10年卒）
釣谷　光博

函中時代、恩師として印象の強かったのは、安保徳輔先生である。全学年を通じて、漢字の書取に悩まされた。繰り返し繰り返し行われ、苦痛にさえ思えた。しかし、お陰様で、その後の人生で、漢字については他人に負い目を感ずることがなく、文字を書くことが、楽しくさえなってきた。もう一つは、詩歌である。例えば、芭蕉の「古池や蛙とびこむ水の音」の句を示し、之を読んで感ずる情景を短文に纏めよ、と言う出題である。私は、勝手な連想をし、感

ずるままを一〇行位の短文にした処、「之でよい」とお褒めを戴いた。それからは、他の俳句や短歌についても鑑賞し、空想し、自分の文章をつくることに興味を覚えるようになった。四年生になって、校友会誌に載せる短歌の募集があった。選者は、安保先生である。当時、私は啄木に凝っていたので、啄木調の歌をつくり、二十首ばかり出してみた。それがなんと、二十首全部が掲載されたので、作者本人がびっくりしてしまった。五年生になると、先生から「今年はお前が選者だ」と言われ、夢中で、他の人の歌を選んだ記憶がある。それ以降、短歌のことは忘れていたが、定年後、短歌誌「潮音」社に入社し、現在は同人として、毎月五首が、同誌上に掲載されている。安保先生は、「アララギ」派であったが、今の私は、「新古今集」派であるのも、何か皮肉である。ともあれ、余生を短歌と言う趣味に導いていただいたのも、先生のおかげと感謝している次第である。

近作二首

○湖の辺の茶屋に暖かき牛乳の濃き味はいを旅と思ひぬ

○見はるかす眞青の海と白き船、ナポリの丘に苺喰みたり

## 白楊魂

39期（昭和12年卒）
安味　貞和

昔、雨天体操場に、陸軍大将の筆になる「白楊魂」と云う扁額が掲げられていた。どう云う魂なのか疑問に思ったが説明も得られず分らずじまいでいた。「すぐ成長し大きくなるが良材とはならない独活（うど）の大木と云うことか」と陰口をたたくものもいた。が毎日教室の窓から、校域を囲むように植えられていたポプラ並木を眺め暮していた。もうすっかり忘れ果てていたが、近年になって、ポプラの木の効用を新聞紙上で発見した。「森林浴」なる言葉が喧伝されている頃である。樹木からは、一般に樹精とも云うべき、生物に有効な気を発散し、空気を浄化して特に脳の働きを活性化する。特にポプラからのものが優れており、量も多く従って範囲も広いと。

この記事で数十年前の疑問が解けたような気がした。かって見た、菩提樹の下での老人を囲む、子供達の集会の、ドイツの風景画も併せて思い出した。

社会に出て、接する人々と、常に佳い雰囲気をつくり出すことの難しさと大切さを散々味わって来たからです。あの校庭のポプラは大きく育っているだろうか。恐らく、あの扁額を揮毫された陸軍大将は「文」も兼ね備えた武人であったに相違ない。

## 乗馬で通学

40期（昭和13年卒）
相馬　正樹

私の生家は上磯と大野村の境界近くの部落で、小さな牧場をやっていました。函館からは直線距離で二〇キロぐらいだからそんな辺鄙な所ではないのに、ここだけは文明から取り残されて、石油ランプの生活が戦後まで続いた由緒ある「ど田舎」でした。中学へは汽車で通学するのだが、昔は冬の降雪量が多く、毎日久根別駅までの雪道の通学には大いに難儀をした。

中学三年の二月（昭和十年）に、道南地方が豪雪に見舞われた。駅までも出られない程の積雪で、当然列車も普通になってしまった。欠席が嫌いだった私は、学校まで馬で駆け付けようと考えた。家ではサラブレットより少し小形のアラブという種類の競争馬を飼っていたから、厩に駆け込んで引っ張りだし、乗馬用の装備をつけて学校へ走らせた。家からは約二時間ぐらいの道程だが、腹に届くほどの積雪を蹴散らして走るのだから、馬は大汗をかいていた。函館の市内に入っても電車は不通で、生徒はみんな徒歩で登校していた。

生徒通用門から入って、玄関脇に馬を繋ぐ場所つまり駐車場を探していると、用務員が珍しそうに寄ってきて「馬はおれが面倒見てやるから、早く教室へ行け」というので、あとを頼んで急いで教室に入った。雪の中に繋ぎっ放しの馬が気になって、授業が終わって玄関に来て見たら、寒空にしょんぼりと佇んでいた。

帰ろうとして右手を見ると、雪野原のはずの運動場一杯に馬の足跡がついているではないか。用務員が面倒見てくれると言ったのは、「かいば」を見つけてくれるのかと思ったら、実は馬に乗りたかっただけらしい。かいばも与えずに彼はゆっくり雪中の乗馬を楽しんだに違いない。数日後、教練の教官から「馬で通学したのはお前か、久しぶりに馬に乗せてもらったよ」とお礼を言われた。用務員は教官まで誘って乗馬練習をしたらしい。それにしては、教練の成績は相変らず「乙」で、馬に乗ったことが成績に何の影響もなかったのは納得が行かなかった。

## 正気と狂気のはざまに見る函館の風景

45期（昭和18年卒）
田沼　修二

文学に描かれた風景は、作者が登場人物の眼を通して見る心象風景であろう。

人の心の深奥に潜む不可解な何か、これは文学の永遠のテーマである。普段は善良に見える少年が、突如狂気としか言いようのない衝動に駆られ、しばしば理解不可能な行動を起こして少年刑務所に収容される。彼を見詰める刑務官は小学生時代に、この受刑者に執拗ないじめを受けた過去を持つ同級生である。

函館西高出身の辻仁成氏が先頃芥川賞を受賞した「海峡の光」は、この二人の不思議な交流を縦軸に、刑務官が連絡船の接客係であった頃、海峡の上で体験した様々な人との出会いと別れ。トンネルの完成による連絡船の廃航と国鉄職員の転職。慢性的な経済不況に喘ぐ函館の盛り場の姿などを織り込みながら、少年刑務所の生活を中心に小説は展開する。

砂山跡近くにある少年刑務所には受刑者の社会復帰のための船員養成の訓練教室があり、実習に出掛けた彼等が目にする函館港や津軽海峡の四季の風光。かつて刑務官の父は磯舟で漁労中に高波を受けて遭難したが、海上から眺めた寒川や穴間など函館山の裏側の姿。いずれも独特な角度から函館とその周辺を描いている。函館山からの夜景や山麓の異国情緒、湯の川温泉にトラピストといった函館観光の定番とは一切縁がない。その描写はあたかも不条理な、不気味な受刑少年の心象風景と、それを凝視する刑務官の心理を投影しているかの様だ。

やがて主人公の受刑少年は優秀な成績を修め、刑務所から仮出獄を許されて出所した直後、突然彼はかつての同級生の刑務官を襲って再び刑務所に戻り、一見平穏な日常が始まった所でこの作品は終わる。しかしこのかりそめの平安が、再び狂気に転化することを読者は先刻承知している。

正気と狂気の狭間に描かれた津軽海峡と函館周辺の空間が、読者にある種の感動を呼び起こしながら迫ってくる作品であった。

（「海峡の光」新潮社刊）

「エトロフ発緊急電」「ベルリン飛行指令」など第二次大戦を背景としたドキュメンタリータッチのユニークな作品を発表してきた佐々木譲が、一転して幕末の北海道に共和国建設の夢を実現しようとした旧幕府軍の

跡を仮想する。物語りの題名は「北辰群盗録」という。

明治二年五月十八日、蝦夷地に共和国建設を夢見た榎本武揚の旧幕府軍は、七千の新政府軍に包囲され五稜郭開城となった。榎本軍は三千の精鋭を揃えて善戦してきたが、鳥羽伏見から数えれば一年半の転戦の末、今一千の傷ついた兵士を残すだけとなっていた。

十八日早朝、武揚は全員に戦いの幕を引くことを告げ、整然と退去するよう最後の命令を下すと共に、別働隊として室蘭に駐在する二百の将兵にも同じ行動をとるよう下命して兵頭俊作と二名の兵士を派遣する。

五稜郭接収と室蘭別働隊解散は大きな混乱もなく終わったが、蝦夷地に共和国を建設しようとする情熱に燃える少数の士官と兵士達は兵頭を首領に頂き、新政府の開拓事業を妨害する。この辺りから物語りは創作の世界に入って行く。

黒地に白い星を染めた共和国の北辰旗を掲げ、共和国騎兵隊を名乗る兵頭達は開拓によって伝来の土地を取り上げられ奥地に追われるアイヌの協力を得ながら輸送途中の開拓使の武器や財貨を奪う。開拓使判官の岩村通俊はこれに対抗して五稜郭開城後、東京に戻り生活苦に喘ぐ兵頭のかつての同僚士官の矢島従太郎を札幌に迎えて討伐隊を編成する。

榎本隊の俊秀な二人の幹部士官が北の大地で対決することになった。物語は和製ウエスタン活劇もどきの展開となり、駅馬車襲撃の銃撃戦や決闘、お雇い外国人の屯する酒場での乱闘などに加え、ついに騎馬隊は札幌の開拓使本庁を急襲したりもする。

革命や戦争は所詮は人間の狂気の産物であり、主人公達の華々しい争闘の背景にある北海道の自然は、やがて彼等を飲み込んでしまい、最後に討伐隊に追われた騎兵隊は雪の広野の中に消えて行く。

蝦夷地に共和国の建設を夢見て戦った榎本は五稜郭で敗れたが、その夢を引き継いで実現しようとするならば、様々な選択があり、作者はその一つの可能性を追求して見せてくれたのである。

（『北辰群盗録』集英社刊）

## もてない

54期（昭和27年卒）
佐藤　正郎

「わたし、もう思い残すことない。」入院の前々夜、ポツリと妻が言う。彼女は五年前手術した大腸癌が肺に転移、再び手術することになったのである。

「大腸癌のときと違って親もいないし子供も独立した。もうすることは何もないの。」「夫の世話があるじゃないか。」「あなたはテルコさんかミチコさんにお世話してもらえばいいじゃない。」二人とも妻が面識ある私の友人で、ともに未亡人。テルコさんは同期生でもある。

翌朝、通勤電車でテルコさんと乗り合わせた。「カミさんがね、自分が死んだらアンタに面倒見て貰えって、どうかね。」「とんでもない。せっかく爽やかで自由な生活をエンジョイしてるのに、また手間を背負いこむのはゴメンだわ。たまに食事を作ってあげるぐらいはいいけどね。」一掬の温情を具備した、まことに明快で溌溂たる回答である。

昨今の未亡人のキーワードは溌溂である。近所でも例外なく集まってはおしゃべり、連れだっては水泳、旅行など溌溂と人生を享受している。『未だ亡びざる人』とは何と不適切な用語であろう。

バタイユは、消費こそが人間存在の根源であり、その本源的意味は『生の充溢と歓喜の直接的享受』だと言う。そうすると、それを自然に実行する未亡人こそ社会の本源的存在なのだ。いま消費社会は資源と環境との限界に遭遇しつつある。とすれば未来社会の消費は未亡人的なそれが主流となるに違いない。なぜなら『生の充溢と歓喜の直接的享受』に最も近い営為である芸術の美や感動は、その制作に要した資源や環境汚染の量とは全く無関係なのだから。

「テルコさんに断わられたよ。」「ミチコさんは？」「どうせ断わられるから聞かない。」すると妻はまじまじと私を見つめてこう言ったものである。「あなたって、ほんとに『もてない』のね。」

夫を世話する人間は自分しかいないという現実が、彼女を奮起させたようである。手術後一年余の現在、妻はますます騒々しく家事を執行し、ますますけたたましく『世にはばかって』いる。

## 小葉松治先生の思い出

79期（昭和52年卒）
福島　陽子（旧姓・若生）

「東京白楊だより」二十周年おめでとうございます。私たちも、卒業してちょうど二十年になりました。時の過ぎる早さに驚いています。

中部高校での思い出は、なんといっても三年間担任をしていただいた、小葉松先生（数学）のことです。先生も函中の御卒業で、日高の方の御出身だと思いますが、夏休みが終わって、一人函館へ向かう列車の中での寂しさや、つらかったり楽しかったりした函中時代のお話を時々して下さいまして、自宅から通う私たちを励まして下さいました。

数学の時間は、教科書・オリジナル（問題集）と精神注入棒という棒を持って教室へこられました。予習が足りなくて問題が途中で解けないと、「見通しが甘いんだ」とよくしかられました。

二年生の修学旅行は、京都、奈良方面で、朝、列車が琵琶湖あたりにさしかかった時、湖西線の話をして下さいました。また、京都では、二条城の話など詳しく教えていただきました。三年の時のクラスは楽しいクラスで、球技大会の時にはクラスのユニホームを作り、黄色のTシャツに、小葉松先生の顔をプリントしました。その似顔絵は、柴田君（柴P・数学の柴O先生の息子さん）が描いたもので、七三に分けてふっくらとした顔が、とてもよく似ていました。卒業式の後の謝恩会で、そのことを先生が、「若い女の子の胸のところで自分の顔がゆれているのを見るのは、と

ても恥ずかしかった。」と、うれしそうに話していらしたのを、よく覚えています。

厳しい反面、私たちのことを本当によく心配して下さっていて、人間味のあふれた、あたたかい先生でした。三年間担任していただいたのは、私と本吉秀世君の二人だけでした。三年間、楽しいクラスに恵まれて、文化祭では、かき氷屋さん、仮装行列では、お祭りのお御輿を作りました。充実した高校生活でした。先生には大変お世話になりました。ありがとうございました。

Tシャツはいまでも大切にとってあります。

## もう一度受けてみたい『女子体育』

79期（昭和52年卒）
小西真由美（旧姓・間）

昭和五八年、九つ下の妹が、中部に入学した時、もう一度、あの方の指導を受けさせたい（私しゃ、すでに第三者になっていたもので）……の願いも虚しく、その一年後にリタイアされてしまった、ドラえもんの『カミナリさん』的存在のあの方、そう！溝江女史に想いを寄せましたので聞いて下さい。

黒鳥の湖の如く、黒光りに照り返っていた、旧体育館。代々引き継がれた毎授業の雑巾がけ（冬はカラ拭き）の所産に他なりませんが、まばゆいばかりの陰には、諸先輩方の涙の結晶も、隠されていたと気づくのに、それ程、時間はかかりませんでした。

私の勝手な憶測ですが、細かったり、背が高かったり、たまたま生意気に目立ってしまった子が、三年間の修業に、勤しんでいたように思えます。修業の同士としては、挨拶が作法にのっとっていなかった（戸を三回ノック）と、土下座した者有り、水着のまま、男子の視線の中、プールサイドをマラソンした者有り、私の当番の時などは、躊躇した目つきが怪しいと、授業を潰してまでも、一時間個人教授に切り換えて戴きました。お陰様で、名前だけは学年中に知れ渡る運びとなったのは云うまでもありません。

あの創作ダンスの、弾性屈伸運動さえ無かったら、タンバリンが奏でる『タンタターン（口でも唱える）』に、うなされることもなく、私の高校時代は、ぶっちぎりのバラ色だったのに……。

「私の青春を返してくれ～。」と、卒業当時は遠吠えしていたものでした。

二〇年以上経った今となっては、すっかり図々しくなってしまったのでしょうか、昔を思い出すにつけ、懐かしくて懐かしくて、怒られても良いから、また、あのチビるくらいの授業を受けてみたいなーと思うに至りました。強烈だっただけに深い印象として、くっきり残っているのですね。

卒業生の世代を越え、共通の話題を肴に、肩を抱きあえる仲にしてくれた、溝江先生に、感謝、感激の嵐が吹いています。時を経て、漸く愛情と憎しみは、表裏一体のものであったと、わかってきました。物事の一面だけを見て判断してはいけない、成長できないと教えて下さっている気がしてなりません。ひょっとして、これって、今なお、先生から生涯教育の授業を受けていることになるのかも……。

## 函中音楽部健在なり！

### 函中音楽部OB合唱団「コール・フォレスト」第1回演奏会

85期（昭和58年卒）広川　裕

故大森清先生といえば、知る人ぞ知る『音楽の虫』というか、いやそれよりも『音楽の鬼』といったほうがよりピッタリくるというか、とにかく音楽に対しては実に厳しい先生でした。

函館中部高校音楽部…略して『函中音楽部』…は、昭和四二年以来平成元年まで、大森先生の指導を受けてきました。先生の指導のもとで、昭和五二年には道コン（全日本合唱コンクール北海道支部大会）で初の金賞受賞。昭和五五年には初めて金賞第一位になり全国大会に出場しました。以来、道コン八年連続金賞、全国大会へも四回出場しました。

昭和から平成へと元号も変わり大森先生も死去されてから、OB、OGもしばらく鳴りをひそめていましたが、「いつまでもこのままではいけない」と、今から三年前に、故大森先生の指導を受けた者たちで「OB合唱団を旗揚げしよう」ということになりました。名前は大森先生の『森』の字に因み、ここに『函中音楽部OB合唱団コール・フォレスト』が誕生したのです。

以来、東京・函館・札幌と三つの支部に分かれて練習を始め、正月休みとお盆休みには函館で合同練習をすることになりました。

初めは各支部とも数名しか集まりませんでしたが、演奏会の日が近づくにつれ、徐々に練習人数も増え、大森先生の七回忌に向けて練習も次第に充実してきました。

そして、平成八年八月一八日に、大森先生を偲んだ第一回演奏会を開催することができたのです。

校歌からスタートし、団員たちには懐かしい函中音楽部の愛唱歌からコンクールで演奏した曲などを披露したあと、最終ステージでは、モーツアルトのレクイエム（死者のためのミサ曲）より抜粋して歌いました。

観客の入りは今一歩でしたが、さまざまな意味で、情熱のこもった演奏はできたように思います。

演奏会が終わった今、故大森先生の音楽に対する厳しさを現在の私たちが果たしてどれくらい身につけ表現できたか、演奏テープを聴きながらじっくり吟味してみたい…今はそんな気持ちです。

●大森清教諭（在職昭和四十二・四～平成二・四）

音楽科。音楽部の指導に情熱を傾け、日本最大の音楽イベント、全日本合唱コンクールに四回も出場させた功績が光る。長く函館合唱連盟の理事をつとめ、平成三年函館市文団協の白鳳賞を受賞。

平成二年四月八日逝去　享年五十九才。

## 第40期・よんまる会

（昭和13年卒）
相馬　正樹　記

わが四〇期は大正九年（一九二〇年）生まれだから、今年は喜寿（七十七歳）を迎えることになる。東京在住者は年三回定例的に「東京よんまる会」を開催して毎回十人前後の出席者でささやかに懐旧談に花を咲かせている。

今年は七十七歳を旗印に掲げて、東京在住者主導で本年六月二十六日、百人の残党を塩原温泉に結集することにした。

函館ならびに道内からの出席者の顔ぶれは、酒の飲める人に限られてしまった感ながら、今まで奥さんを無視してきた反撃に屈してか、同伴者が急増し、出席者は二七名で大盛会であった。

開催の案内を出して出欠回答の中から近況を手掛かりに健康状態を調べて、来世紀までの生き残りを予測して見た。

現存者数九八名（卒業時の三九％）で、最近三年間に十二名が他界しているから年間平均四名ずつが亡くなる勘定になる。ところが総理府の人口動態調査によれば、今後はそのテンポが早くなり、七十九歳までの人口は八十五歳までに六五％に減り、さらに九〇歳までには二八％に減ることになっている。とすれば、七九歳までに十五人減るとして、二十一世紀の日の出を拝むことのできる人は八三名いる。八十五歳までには旅立ちを急ぐ人が多くなり五四名に減る。それからなお卒寿（九〇歳）まで生き延びる人は、気息奄々ながらも二三人もいる計算になる。この数は多いかどうかは知らないが、ここまで生きたら、第二次大戦の戦火をくぐり抜けて、戦後の最悪の食糧事情に耐えたにしては、大往生と言わねばならないだろう。

## 第44期・獅子の会

（昭和17年卒）
勝浦　寛　記

44期生の東京周辺在住者の集まりは、故鎌田実君が中心になって昭和四十年代から三、四年ごとに開かれていた。昭和六十年代になり、現役を退く者も多くなって、夜の会を昼にしてはどうか、また年に一度定期的に開いてはとの意見があり、平成に入ってから、44期にちなんで毎年四月四日近くの土曜日（今年からは日曜日）に開催、今日に至っている。最初の定例会で幹事役の佐藤文三君の発案で、『獅子の会』と呼ぶことになった。出席者は十五名前後で、会の行事も定例会がすべてであった。平成七年開催予定日の数日前に、引き続き幹事を続けていた鎌田君が病没したため、急遽日野文磨君に引き受けてもらい、さらに今年になって小生が引き継いでいる。年齢が七十歳に達して以後毎年二～三名の物故者が出始め、現在名簿上の人数は四十四名である。また、遺族等からの知らせがあった時は、会の名前で供花を行っている。

## 第45期・翠楊会

（昭和18年卒）
田沼　修二　記

翠楊会東京支部の集まりは、例年通り二月最終土曜日・九年二月二十二日正午から青山のNHK青山荘に二十二名が集まって開催。先ず亡くなった級友に黙祷を捧げ冥福を祈り、函館本部から参会の越田会長より会の現況報告に続いて、函館からの消息で、多年会の運営に尽くされた尾崎彦平幹事長と、函館中部高校一〇〇周年記念誌「潮流」の編集に取り組み、完成を待つかのように逝去された澤田正君の二人の功績を偲ぶ発言があった。

札幌から遠来の照井君の音頭で乾杯して懇親に移ったが、札幌の級友の消息の中に、前日に三国君が亡くなったとの報告があり、古希を過ぎたお互いの身辺の慌ただしさを改めて痛感した。

川田君差し入れの秋田の銘酒等で程よくアルコールが回り、近況報告に入ると、友人の消息、家族の話題、成人病の悩みなどが語られる。そのうちに、いつも繰り返される懐旧談に華が咲いて談論風発となり、話し疲れた頃、恒例の校歌合唱と記念撮影で締括る。今年の風邪は長引くタイプで、出席予定者の何人からか急に欠席の連絡があった。次回からは暖かい時期を選んではとの意見もあり再会を約して三時過ぎに散会した。

昨年の会で田村正平君（地理の田村先生（S三年～十五年）の御子息）が語ったところによれば、卒業後海軍航空隊に入り、大戦中零戦のパイロットとして、アメリカのグラマン戦闘機と交戦、五機を撃墜し、現在アメリカのスミソニアン博物館に写真と共に記録が展示されているとのことである。しかもこの話が我々への遺言となって彼は昨秋亡くなられたので、あえてお伝えした次第である。

## 第46期・活動状況報告

（昭和19年卒）
渡辺　保二　記

46期同期会は毎年11月に有楽町のニュートーキョーで行っている。ニュートーキョーの初代社長は函館の方で社員も函館出身者が多い関係で昔から函中の同窓会はじめ、函館市立中学（現東高）、函館工業高校、函館高女（現西高）の同窓生が利用している。交通も便利なので46期会は此所を会場に決めてから既に三十余年になる。同期会などの集まりは夜が殆んどであるが、齢七十を過ぎると体力は衰え、酒も弱くなってくるので二年前から土曜日の午後行っている。電車は空いており、帰宅も楽なので出席者からは好評をいただいている。現在四十余名の会員中、昨年の出席者は十五名足らずで、やはり物故者が増え病気がちの者も居り年々減っていくのは致し方ないが、ちょっと淋しい気がする。しかし出席者は皆元気で懐旧談や健康談義に花を咲かせ、終わりには函中校歌「玄冥の…」を斉唱し散会した。なお二年先の五十五周年の集いには皆元気で函館に行こうと誓い合った次第である。

## 第47期・古希を迎えて

（昭和20年卒）
松村　豊　記

古希を迎える歳になると、お互いの無事を確かめ合う機会を持ちたいと思うのもしょうがないことですね。

今年の正月早々のこと、吉田治作さんから電話があり、「年に一回では物足りない」という御人が現われたので、とりあえず、電話と葉書で連絡することにした。「ご用とお急ぎでない方は、勝手に集まって一杯……」と急遽、臨時同期会を開くことになりました。

一月一八日のお昼に、いつものニュー・トーキョーで、二十名近く参集し歓談しました。発起人は木下孝郎さんであったという事です。

四七期の定例の同期会は四月七日に、いつもの場所、有楽町・ニュー・トーキョー・六階・ロチェスターで例年より開催時刻を一時間早めて開催。

理由は、コキ・コキと、歩くのにも音を出し始めたから…。本当？…

函館から戻ってきた岡本尚久、フィリッピンへ長期出張していた、白旗総一郎の両氏も加わって二十四名が参加、快適な時を過ごし、来年の再会を約して散会しました。

いつも出席していた久保田舜一郎さんが昨年不帰の人となられました。

謹んでご冥福をお祈り致します。

## 第51期・あずまし会

（昭和23・24年卒）

三國比左男　記

昨年、郷土の画家田辺三重松氏の「生誕百年記念展」が横浜・奈良・千葉・東京で開催された。同氏の長男淳一君が我々と同期なので十二月の東京展で上京の彼を囲んで懇親会を持ったが、その際、三重松氏が庁立高女の先生だったことから同年の高女生に声をかけてみたところ、六名の方が参加してくれ、これで憧れの庁立高女生との交流の糸口ができた。

五一期「あずまし会」の総会と懇親会が四月一九日、日比谷『聘珍楼』で行われ、会員はわずか一六名の出席だったものの、前記の高女生達七名が参加、更に函館から「どんじり会」会長西村源太郎君、函館支部長青田秋彦君、幹事柴田隆一君が、平成十年十月十日の卒業五〇年函館大会の勧誘のため特別に参加、会はいやが上にも盛り上がった。

解散後の二次会にも女性二人も参加してくれ、楽しい素晴しい会合に終始した。

憧れの庁立高女生と言っても五三期以降の共学組にはピンとこないかも知れないが、「男女七歳にして席を同じうせず」時代を過ごした我々には、今回の高女生同席は正に画期的出来事だったのである。

## 第54期・四五周年同期会

（昭和27年卒）

佐藤　正郎　記

六月一日、日曜日。湯河原の温泉ホテルに四〇名が集まった。卒業四五周年。北は札幌、南は福岡からの善男善女たちが、クラスごとに舞台に立つ。「オレは何組だったっけ。」「四組、それぐらい覚えときなさい。」トシと共に忘れっぽくなるのは自然現象なのである。

席が乱れ、懐旧談があちこちで花開く。「あの女性は誰だっけ。」「誰かしら。」「淋しそうね。」「行くべ。」知る知らないにかかわらず、淋しそうな顔は見逃すわけにはいかない。このオセッカイヤキ精神が五四期の特色である。「あのう、何組でした?」とたんに隣席の男性があわてた。「これ、オレの女房。」彼は夫人同伴で出席してくれたのである。

「来年は関西か札幌でやろう。」と声があがった。「札幌はいつでも行けるから関西がいい。」と、これは函館組である。「よし、関西、幹事はオカモトとウノ、頼むぜ。」結論が滅法早いのも五四期の特色である。

二次会はカラオケ。椅子が不足し、あふれた連中が壁ぎわの床に座る。ちょっとしたホームレスの雰囲気である。顔に似合わぬ美声にヤッカミの声がとぶ。「あの声で、トカゲ喰うかや　ホトトギス」

翌日、半数がバスで箱根へ。乗車直前に声がかかった。「アンタ明日はヒマでしょう。」「いつでもヒマだけど、何だい?」「東京案内してあげてよ。」函館組のうち東京周辺に子供のいない三人が、新宿にもう一泊するという。「どこへ行きたい?」「『ゆりかもめ』でお台場。」「あそこは最もナウいデートスポットだぞ。」還暦すぎの団体は似つかわしくないとの含意はすぐ通じる。「いいじゃない、孫へのミヤゲ話なんだから。」孫には弱い。抵抗は『孫なき男のヒガミ』でしかない。「わかった。会議を済ませてからホテルへ行くよ。」

六月二日のお台場は快晴。ほとんど真夏の太陽が砂を灼いていた。甲羅干しが数名にウィンドサーフィンが一人。ウィークディのお台場は、信じられないほどの静寂である。白砂と青海の彼方に高層ビル、日本離れした風景をしばらく楽しんだ。

銀ブラしてから食事。そして浜松町まで送った。来年は関西、有馬か奈良か。一人も欠けず、いやもっと多くの顔が見たいものだ。それまで愉快な話題をたっぷり体験しておこうじゃないか。アウフ・ヴィーダーゼーエン。モノレール駅の改札口で、たった一人の見送り人は『思い』をこめて盛大に手を振ったのである。

## 第55期・函中ニッパチ会

（昭和28年卒）

三浦　昭夫　記

今年で二十回の節目を迎えた総会は六月七日十八時よりリトルパイレーツ銀座店で、恩師青野朋義先生をお迎えして二十名が参集し開かれた。

はじめに世話役員の交代が提議され大沢勘八会長、阿部健、田子嵩也幹事に代わり、新しく栗崎健一会長、赤沢高、山口ヒロ両幹事を全員一致で選出した。前会長、幹事には忙しい中を長い間ご尽力していただき深く感謝する次第です。

青野先生の乾杯の発声で懇親会に移り、一人ひとり近況報告をしてもらった。現役を退き年金生活に入っている人が多くなっているので健康管理や余暇の過ごし方など、これからの生き甲斐について話が集中していた。一年ぶりの歓談が尽きることなく続き、記念写真を撮るのを忘れるところでした。

二次会は銀座の某クラブ?を貸し切り設定、終電間際までゴルフ談義、カラオケと賑やかに親交を深め、最後に一本締めで次回の再会を約し散会となった。

なお本部総会は十月十一日(土)湯ノ川温泉で、来年は関西地区での開催を予定しています。

## 第60期・隅田川遊覧の同期会

（昭和33年卒）

北原耕太郎　記

函中百周年大会のため、二年ぶりの開催となった平成八年。お座敷ばかりではなく、変わった趣向でということになり、東京港夜景めぐり、隅田川を上り、浅草までのナイトクルージングとなったわれ等「三三会」であった。

その当日、十月二十六日。運悪くすごい強風で寒い日となってしまった。

乗合は浅草出発と決まっているが、貸切りは自由で、それなら日の出桟橋出発、浅草下船、そして二次会をという計画にした。

いよいよ午後六時、集った三十名が乗船して出発。レインボーブリッジ他、港を一周し隅田川へ入った。勝関橋から始まり十一の橋をくぐり抜け、あっという間に終点の浅草吾妻橋へ無事到着。全行程一時間半である。船中、遊覧より飲食に忙しかった感がある?

浅草で二次会から参加の四名と合流。二次会は、電気プランで有名な神谷バーの予定であった。神谷バーは、予約受付はしないということであったが、五階までもある広いところだから、何とかなると思っていたが、満員で入れない。

土地に詳しい杉村博敏君の案内で、新仲見世通りの「つるや」へ納まってやれやれ。にぎやかに騒いで十時頃散会したが、二十名ばかりまだ物足りなくて三次会も開催ということになった。まだまだ元気元気。

## 第63期・午未の会

（昭和36年卒）

小林　嘉則　記

四〇歳から始まった東京での同期会も十五回目を数え、いろいろ変化が目立ってきた様ですが、気持だけは至って若いつもりの五十五歳。いつもの七月第二土曜日、ニュートーキョー桃杏楼に集う。今年一月に亡くなった間宮明子さんに黙祷。山崎良英君の乾杯が終わるやいなや始まるおしゃべりのざわめき……。一年振りもいれば実に三十七年振りの野波昌昭君。初参加ということでトップのスピーチをしてもらったが、何せ

誰れが誰れだが皆目わからないといった浦島太郎の心境で、何を話せば良いものやら……といったところ。

今回は女性が五名と少なく一次会の出席者二五名全員にスピーチをしてもらえました。十二年振りの浜岡興一郎君、福岡から来てくれた鎌田一良君。深夜バスで三重から飛んでくる橋本釉子さん。さすがに元気いっぱいです。

七時半からの二次会はビヤホールミュンヘン。ただただおしゃべりしているだけで、あっという間の二時間も過ぎ、有志による三次会はいつもはワインバーになるところが、たまたまカラオケ好きがいたせいで、めずらしく歌の会になる。店の制限時間が十一時だったから良かったものの歌い始めたらキリがないのがカラオケ。

ホテルに送った鎌田君の部屋でチョッとビールを飲んでまた一時間。いやはや疲れますねえ同期会は…。

## 第64期・同期会のお知らせ

（昭和38年卒）
徳田　定勝　記

一〇月二五日(土)六時より、浅草・あみ清にて。暮なずむ墨田川を船で下ります。二次会会場の魚眠荘(電話三八四四―五一一七)に、宿泊も予約しました。ギャをフルアップにして参加して下さい。

世話人［徳田定勝・泉清美］

## 第65期・函中三八会

（昭和38年卒）
菅原　大作　記

今年の函中三八会は、七月十九日(土)、午後六時より、東京・有楽町の『西洋酒場・夢の樹』で行われた。

同期会は、昭和五二年に第一回目を行って以来、毎年一回実施してきている。ここ数年は七月の第一土曜日としてきたが、今回は有力メンバーの一人の鎌田佳勝君が、東京を離れて函館へ帰るため、同君の送別会を兼ねて実施することとし、同君の都合によりこの日の開催となった。しかし、連休の初日となったためか、『家族旅行で欠席』という返事が多く、今回の出席者は、女性八人、男性十七人の計二五人。例年に比べて少なかった。

参加者には、例年と同様に欠席者から届いた近況報告と、最新の住所録を印刷して配布した。

会では、久し振りに会ったとは言え、全員が仲間同士。開会のための改まったあいさつや乾杯などの形式ばったことは一切取り止めて、ちょっとの時間も惜しむかのように、卒業後三四年間の空白を埋めるべく、お互いが高校時代に戻って積もる話に花が咲いていた。

そして、午後九時を回る頃、出来るだけ短く自己紹介を兼ねた近況報告を行った後、記念写真を撮影、次回の再会を約束して閉会とした。しかし、なおも別れがたく二次会、そして三次会へと……流れた。

## 第69期・同期会に参加して

（昭和42年卒）
安藤　牧子（旧姓笹田）　鈴木　憲司　記

第六九期火ばしら会東京支部第十一回同期会が、五月三十一日夕方五時三〇分から、飯田橋で開かれた。このような会があることを、私は二年前まで全く知らず今回初めて参加させて頂いた。この会のことを、知ったのは全くの偶然からで、ある日仕事で電車に乗るため、田町駅のホームにいたところ、見知らぬ?中年女性から「鈴木君じゃない」と突然声をかけられた。それが、同期のMさんと分かりその後幹事の梅田さんからの連絡を頂くようになった次第である。

五時過ぎに会場について、それらしき集団がいるのを見つけた。しかし、卒業以来殆どあったことのない人達で、私には誰が誰やら良く分からない。その時一人が声をかけてくれた。どうも卒業以来三十年もたっているのに、私は高校時代と余り変化していないようですぐ分かるようだ。当日は、主に東京地区在住の男性二十名弱、女性十三名そして札幌から安藤牧子さん(石狩で植物画を書いておられる)が特別参加された。会は自己紹介と近況報告から始まり、楽しく和やかな雰囲気で進んだ。近況報告では、既に孫がいるという男性がいて驚かされた。

また、男性陣は今がもう一頑張りという年齢で、自分も含めて公私ともに大変そうに見えたのに、女性陣は漸く子育てが終わり、何となく時間的にも経済的にも余裕があるように見受けられた。懐かしい先生達や友人達の近況を聞きながら、よもやま話をしていると、あっという間に二時間半が過ぎ、一次会はお開きとなった。二次会は、一橋の如水会館で行われた。ここに名古屋からの出張帰りで何とか駆けつけた斉藤君が参加された。斉藤君と近況を話しあったりしていると、時間が過ぎ二次会もお開き。今後の再会を約し、記念写真を撮って同期会は終了した。日頃の仕事での会食、会社の同僚との飲食とは違う肩の張らない楽しい一時であった。今後とも是非参加させて頂きたいと思っている。（鈴木）

「お久し振り!」「変わらないね!」の言葉が飛び交う同期会、会場のロビー。

高校時代のあの顔がそれぞれの場所で歳を重ねて来たのだろうが、会ったその瞬間からあの時代にスーと戻る。考えてみれば不思議な光景かも知れない。「変わらないね」と言いながら、私達も世間から見れば確実に中年のおじさん、おばさん、白髪が増え、お腹が出ても、向き合った表情の中に高校生の時の彼等がそこにいるのです。時間を飛び越えたような不思議な空間です。

この度上京する機会を得て、幹事である梅田やよいさんから連絡をいただき、初めて東京支部の同期会に参加させていただきました。今までの函館の同期会とは少し違う家族的な親密さを感じたのは旅の感傷の所為ばかりではなさそうでした。故郷を遠く離れて暮らす人達が一時、都会での装いを脱ぎ捨て、函館弁で素の人間になれる場所なのかも知れない。「ここに出てくる人はそこそこ幸せにやっている人かしらね。」と言うと、彼女いわく、「でもそれだけではなく、逆に苦しい時にここでエネルギーを貰っていく人もいるのよ。」と。

東京火ばしら会の暖かな交流を垣間見たような気がしました。

翌日、松川宏子さんの呼びかけで中学校も一緒だった女性だけでの昼食会、30年振りの再会に話も弾み「いつまでもお友達でいようね。」などと女学生が言うような言葉を照れもせず交しながら再会を約束。

在京中ボタニカル・アート展をいくつも観て回りましたが、御上りさんの私を案内して下さった、梅田やよいさんには感謝の言葉が見つからない程でした。

久し振りの東京、出会った人皆優しく、暖かく、ビルの谷間から見た東京の淀んだ空も雑踏も全てが好印象として私の心に残りました。

それにしても、新宿御苑で見た泰山木の純白の花、手が届きそうな所に咲いていて感激でした。（安藤）

◇和田　貞一（24期・大10卒）
小生大正10年3月、4年修了で函中を去り、第一高等学校、東京帝大経済学部を了えて、昭和2年春社会人となり王子製紙に入社、現在達者で特別顧問としてこの会社に在籍して居ります。

◇因熊国太郎（33期・昭6年卒）
東京白楊だより19号を読んで、自分の思い出とダブらせ懐かしんでいます。

◇能登谷高雄（33期・昭6年卒）
函中卒業も大分遠い昔の事となりました。東京大会に出席したいのは山々ですが脳梗塞のあとのリハビリ中のため残念です。

◇木原　芳男（34期・昭7年卒）
私も八二歳になりましたが至って元気です。いずれ母校も訪れたいと思っております。

◇松丸　秀夫（35期・昭8年卒）
昨年病気をして入院しましたら、担当の看護婦さんが後輩であることが判って有難い奇遇でした。

◇佐藤　洋（35期・昭8卒）
小田急向ヶ丘遊園と読売ランドの間の多摩丘陵の山の上に住んでいます。八一歳となりましたが何とか元気で悠々自適というところです。
東京支部の会には初めて出席します。若い方々の元気なお顔を拝見して若返り、また、現在の函館の話を聴きたいと思います。

◇佐々木孝允（35期・昭8年卒）
今年は公私共に難時あり、いろいろと通り越しましたが、お陰で身体は毎朝の訓練で無事。六月には東京での同期会に参加でき、すぐ帰新した次第。

◇浅野増太郎（37期・昭10年卒）
我々三七期は毎年、札・函・東京と幹事持ち回りで全国大会（十楊会）を催して来たが、年々集まりが悪くなり、昨年百年祭の折、平成八年度はとりやめ、九年の東京での総会で終わりにしようということになり、六十年間続いた同期会を閉じ、今後は各地区でそれぞれ親睦を図ることにしました。残念ですが歳には勝てません。他の期の皆さん頑張って下さい。

◇吉田　三郎（38期・昭11卒）
私は函館の同窓会から情報をもらっております。同期生とは時折会合もやっております。

◇松本　大壹（38期・昭11年卒）
東京白楊だより19号、大変楽しく読ませてもらいました。遠隔地に住み老齢（七八歳）では、簡単に旅行も出来ません。従って19号の「我が故郷函館・街・人・思い出」は生まれ故郷に帰ったような気分になりました。とくに戦後の故郷は静かに眠っているように、歴史と風景だけが売りものになったように思われます。

◇樽田　和彦（39期・昭12年卒）
東京白楊だより19号、有難うございました。函館・函中についての昔懐かしい記事が満載され、屈折した青春の嫌な思い出は何処かへふっ飛んでしまいました。やはり歳のせいでしょうか。

◇今井　清（40期・昭13年卒）
東京白楊だより19号、興味深く拝見しました。

◇佐々木忠郎（41期・昭14年卒）
譬ふれば母川回帰の鮭なるか老いてさすらふ砂嘴の上の町

◇小山田　彰（42期・昭15年卒）
希望と清新の気持で毎日健やかに有意義に過ごしたいものです。平凡な生活の中に真実の道を体得できれば幸せに思います。

◇小山　俊介（43期・昭16年卒）
白楊だよりは遠隔地に住む身に唯一の想い出の種です。いつもありがとう。

◇中島　二郎（43期・昭16年卒）
何分、田舎に住んでいるため、同窓会にも出席せず失礼しておりますが、大先輩の田中清玄氏の邸宅が拙宅の近くにあるのを知り驚きました。もっと早く知っておればお目にかかれたかもと残念です。

◇森松　高司（43期・昭16年卒）
震災時の水運びが原因で老妻が歩行困難となり、現在通院中。介護が必要なため、関西支部のイベントには参加できません。このまま東京支部に残籍します。

◇池田　隆治（45期・昭18年卒）
東京白楊だより19号はテーマを特定しないで、却って色々な内容で楽しかった。

◇田沼　修二（45期・昭18年卒）
東京白楊だより19号は内容充実して読みごたえがありました。在校生や校長先生の記事は大変興味がありました。

◇水澤　哲二（46期・昭19年卒）
七〇歳を過ぎ身体のあちこちに故障が出て来ましたが、出来るだけ週一回のゴルフは欠かさぬよう頑張っております。

◇篠田　作衛（48期・昭20年卒）
東京白楊だより19号、懐かしい話が沢山あって誠に愉しく拝読しました。

◇寺井　滋（49・50期・昭21・22年卒）
19号大変面白く読ませて頂きました。次号も楽しみです。また「潮流」が届くのを心待ちにしています。

◇岡田　潤（51期・昭23・24年卒）
年会費の一括納入ができないものでしょうか…？

◇宮本　栄輔（51期・昭23・24年卒）
関西支部第二回の集いに出席の予定です。東京も日曜日だと出席し易いのですが……。

◇太田　輝夫（52期・昭25年卒）
未だ生臭く元気でいます。

◇池田　正文（53期・昭26年卒）
お互いに健康に留意して頑張りましょう！

◇佐藤　堅一（54期・昭27年卒）
小学校卒後五十年のクラス会が一一月にあり、六二歳の小学生として函館へ参ります。五十年振りの再会やいかに。

◇浅岡　勤（56期・昭29年卒）
毎年、東北道をマイカーを駆って函館に心は飛んで行ってます。六一歳となり、いつまで運転して行けるか考えてます。はこだて観光大使を命ぜられたので、いろいろ努力しています。

◇伊藤　紀子（60期・昭33年卒）
百周年祝賀会場で校歌を歌った一体感、感激、旧友との交流。帰宅してからは潮流を読む楽しみと、故郷、友人、母校を身近に思う至福の刻をありがとうございました。

◇佐々木孝吉（60期・昭33年卒）
日曜、祭日しか休めないので、いつも同窓会に参加できず残念です。

◇村本　光彦（61期・昭34年卒）
今年のお盆は帰省して懐かしい函館の街を巡りました。

◇玉川　修（62期・昭35年卒）
最近はゴルフ上達せず、写真に入門致しました。

◇石川　法子（68期・昭41年卒）
同窓会の便りいつも懐かしく読ませて頂いています。皆様とお顔を合わせたいと思いつつ、都合がつかず残念です。

◇坂口　勇治（69期・昭42年卒）
関西でも三橋氏のご苦労により平成八年一一月一七日に同窓会が開かれるので出席するつもりですが、「東京白楊だより」も送って下さい。

◇園　繭美（69期・昭42年卒）
第一回関西白楊ヶ丘同窓会の集いの様子を掲載して頂き（19号）ありがとうございます。第二回の集いにも出席する予定です。また、「石狩の植物画」の安藤牧子さん（19号に掲載）とは親友でしたので、また久し振りに電話して懐かしくお話しました。

◇板垣　裕則（70期・昭43年卒）
現在、流れ流れて尼崎在住（転勤中）。関西支部の集まりがあったら教えて下さい。

◇小板　繁（70期・昭43年卒）
豊田市内にも同期の方が一名おられ驚いています。

◇川村　哲雄（71期・昭44年卒）
土曜か休日に開催してくれると出席できるのですが…。

◇本吉　英紀（71期・昭44年卒）
土曜か休日に開催してくれると出席できるのですが…。

◇清水　真（82期・昭55年卒）
中大法学部、慶大法学部、筑波大第一学群での教歴が間もなく十年に達します。母校の学力が衰退して行く一方なのが悲しく思われてなりません。民事法上の解釈と交錯する刑法の本が五冊目の著書として刊行されます。

◇宇津木博美（84期・昭57年卒）
卒業してからあっという間に十年以上が過ぎてしまいました。高校生時代が非常に懐かしく思い出されます。

◇増川　史洋（84期・昭57年卒）
支部の活動にあまり有難味を感じませんし、その上会費の納入率が劣悪なのに真面目に払うのはどうも納得がいきません。いっそのこと任意加入にしたらどうですか？

◇石岡　秀昭（85期・昭58年卒）
卒業後初めて同期会に出席しましたが楽しい会でした。

◇佐々木正城（86期・昭59年卒）
平成八年二月一日付で広島に異動しました。中国・四国地方に在住の同窓生と連絡をとり合いたいと思いますのでよろしくお願いします。

# 評議員会報告

69期・副支部長　梅田やよい

平成九年度の評議員会が四月二十四日、飯田橋のインテリジェントロビー・ルコで、二十九名出席のもと行われた。

午後六時三十分、二上支部長の挨拶のあと、菅原・真船両副支部長より、平成八年度の事業及び収支決算の報告があり、田沼監事からの監査報告を受けて承認された。

続いて平成九年度の事業計画・予算案が提案説明され、原案どおり承認された。

このほか菅原副支部長より、前年度の会費納入状況が悪化したので評議員の結束を図るための組織強化が課題という内容の発表があった。

小林副支部長からは「東京白楊だより」第二十号の原稿依頼の要請及び今年度はいつもより発送を早くしたいという説明等があった。

また、高木副支部長からは、親睦大会の開催予定日等の発表があった。

このあと質疑に移ると、五十二期長島評議員より、関西支部が発足したことで年会費の要請をどの地域までにすべきか悩んでいる旨の発言があり、それを受けて、各年代から様々な意見が出されたが、期によってそれぞれ事情が違うので、各期の評議員の判断に任せたいという、司会の菅原副支部長の発言で、その場は打ち切られた。

そして七時十五分閉会のあと、そのまま同じ席で会費制の食事会に模様替えとなり、昨年同様に和気あいあいの雰囲気の中、新旧の評議員の活発な意見交換の場として親睦が図られた。

## 平成8年度東京支部会計決算書

| 収入の部 | |
|---|---|
| 前年度繰越金 | \5,624,186 |
| 総会費(180名) | \1,440,000 |
| 年会費(1,051名) | \3,152,000 |
| 利息収入 | \55,200 |
| 雑収入 | \120,000 |
| 計 | \10,391,386 |

| 支出の部 | |
|---|---|
| 総会関連費 | \1,422,207 |
| 会報関連費 | \982,542 |
| 事務費 | \627,197 |
| 会議費 | \217,582 |
| その他 | \641,590 |
| 次年度繰越 | \6,500,268 |
| 計 | \10,391,386 |

# 白楊ヶ丘同窓会東京支部ゴルフ会

「第7回・8回ポプラ会」報告　63期・副支部長・小林嘉則

四年目に入ったポプラ会の第七回は平成八年十一月十二日、GMG八王子で開催。当日は中央高速の集中工事と重なり、スタート時間が混乱するアクシデントがありましたが、コンディションにも恵まれ無事終えることが出来ました。今回は第六回優勝の笠原静雄氏(59期)が連続優勝という新ペリアにはめずらしく安定したスコアとハンデが出ました。また、ベスグロも二回連続で60期の伊藤威史先輩が取られ実力を充分に発揮されています。

第八回目は平成九年五月十七日初めて土曜日開催が出来ました。60期の理事をしていただいている北原氏の関連会社のコースという事で特別料金で平日並みの扱いをしてもらい、コースもすばらしく大変な好スコアが続出しました。

優勝されたのは函館から初参加してくれた坊吉太郎先輩(54期)。39・41グロス80のスコアでベスグロと二上賞を獲得され、わざわざ飛行機で来られた甲斐もあって、しっかり東京でのコンペを楽しんでいただいた様子でした。次回もぜひ大阪からかけつけてくれる松岡先輩共々出席して下さい。他にも初参加してくれた52期の佐藤信先輩、63期の小見美佐子さん、75期の高橋日出樹君(今回一番の若手)またがんばって下さい。コースのクラブバスがないため、送迎に御協力いただきました車運転の皆様に御礼申し上げます。

次回第九回は十一月中旬に予定しておりますが、詳細未定の為十月八日の親睦大会までにお知らせ致します。案内郵送御希望の方はFAXにて住所、名前、期を御連絡下さい。

FAX〇三・三四二四・六八五四

小林宛

# コーラスグループ『ほら武の会』

64期・佐古即興

『ほら武先生のこと』

酒井武雄先生を覚えていますか。通称ホラタケ。懐かしいですね、この「ほら」という言葉。先生は音楽の授業中に、または音楽部の練習の合間に私たちに夢のような楽しい話をたくさんして下さいました。私は今はほとんど死語になってしまった「ほら」という言葉を見ると、あたたかくて大らかだった酒井先生を思いだし、先生の言葉が私たちを未知の世界へ誘っていた少年のころを思い出します。

『あの「ハレルヤ!」をもう一度歌いたい』

忘れられないのは、毎年文化祭のコンサートの最後に歌うことが恒例になっていた「ハレルヤ!」です。「あの青春のころの感動をもう一度味わいたい、ハレルヤ!をもう一度歌いたい」という仲間が三年前に集まって会が発足しました。会の名前は酒井先生に因んで「ほらたけの会」となりました。

『一緒に歌いましょう』

今会員は一六名。今年から東京芸術大学大学院のオペラ科を終了されたプロの先生に指導を受けています。曲目は童謡から宗教曲まで、レパートリーはまだ十数曲です。練習は第二・第四土曜日の午後三時〜五時、吉祥寺で歌っています。「ハレルヤ!」を歌うにはまだまだ人数が足りません。会では今広く会員を募集しています。函中の同窓生はもちろんのこと、家族のご夫婦や子供達の参加も大歓迎です。

連絡先は　岩間迪子(旧姓高木65期)

〇三―三九三六―〇六五九

# 第21回親睦大会

## 10月8日(水)、アルカディア市ヶ谷で

### 講演「幕末箱館の明と暗」　渡辺 憲司氏

**●講演者プロフィール●**

◆渡辺憲司 氏略歴

一九四四年(昭和19年)函館市生まれ。

千代田小学校、中央中学校を経て、中部高校を卒業。

立教大学卒業後、横浜市立商業高等学校(定時制)、武蔵高校、梅光女学院大学での教師生活を経て、現在、立教大学文学部教授。

都民カルチャーセンター講師の他、95年にTBSテレビ・ザ・フレッシュのレギュラーコメンテーター。96年、アメリカ・インディアナ大学客員研究員、台湾・輔仁大学の客員教授。

専門は、江戸時代の文学・風俗史。

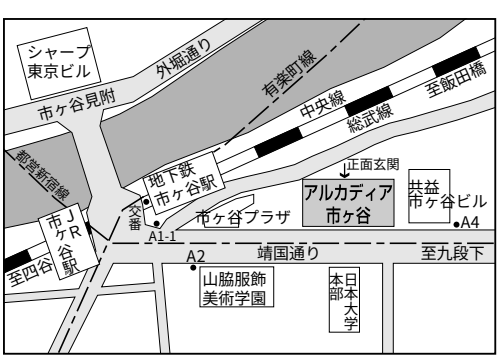
主な著書に、「仮名草子集」(岩波書店)、「江戸のノンフィクション」(東京書籍)、「江戸遊里盛衰記」(講談社現代新書)、「近世大名文芸圏研究」(八木書店)などがある。

**講演のテーマ**

**「幕末箱館の明と暗」**

開港地としてにぎわう箱館に成立した〔遊廓〕の状況や、ペルリがみた〔子どもたち〕の生き生きとした生活の様子を見ながら、日本の近代化が生み出した明と暗の部分に照明を与え、現在の我々の置かれている状況を考えてみたい。

アルカディア市ヶ谷(私学会館)／〒102千代田区九段北四―二―二五／電話03(3261)9921(代表)／市ヶ谷駅徒歩二分／JR中央線・営団有楽町線・南北線・都営新宿線




**訃報**

菊池禎祥先生永眠

「オモチャ」こと数学の菊池先生が七月十一日西堀病院にて枯れる様にお亡くなりになりました。満九十歳でした。

昭和十七年より二十四年間、函中にて教鞭を執られ、その後十年間ラサール校に勤められた。

私は欠席が多く、落第する筈だったが、オモチャ先生の「彼を停学させると廻りの生徒に悪影響をおよぼすから追い出した方がよい」との弁護?で追試験もなく卒業証書を貰った。四十年振りにお会いした時、当時のお礼を言いましたら、「そんな事は知らないよ」とトボケておられました。

先生には七人のお子さんがおられ、皆コモチャと命名された。長男、昶史君とは同期で、八月一日、桃香楼で先生を偲びながら二十名、納涼会を行なった。

五十二期　福津達男記

**編集後記**

「東京白楊だより」が第20号発行という節目にあたり、もう一度同窓会の在り方を振り返ってみるつもりで、各支部や他校の『同窓会の成り立ち』をレポートしていただいた。執筆された皆さんは当初から参加している方々で、文面からも母校を思う気持ちが伝わり、『共通の絆』というものを新ためて感じている。

この会報もその『絆』を基に、会員の方々のコミュニケーション広場になってくれる事を希っているわけで、毎回原稿やコメントを寄せて下さる先輩、諸氏の皆様からはその気持ちが充分に感じられ、それを大事にして編集にあたっている。

同期会に初めて参加した時の惑いや感激が、同窓会の場でも先輩・後輩との旧交を暖め、恩師を語り、函館を思い、そういう広場になって欲しい。西高・東高との交流もその延長で、ゴルフ会開催の予定も含め益々『函館の絆』は深まっている。

●発　　行　白楊ヶ丘同窓会東京支部
●発 行 人　二上　達也 (52期)
●編集責任　小林　嘉則 (63期)

【東京事務所】
〒160-0022
新宿区新宿1-14-6 御苑ビル
スパース販売㈱内
TEL：03-3352-6281
FAX：03-3341-5048